

百五十年式年祭記念

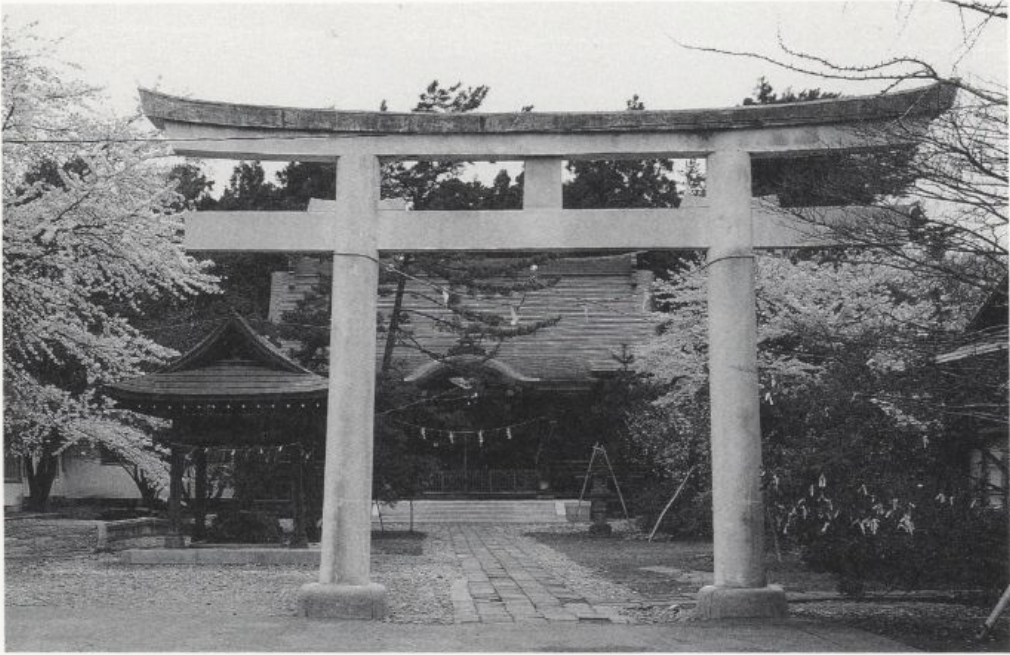
平田篤胤大人凶集

百五十年式年祭記念



平田篤胤大人函集





彌 高 神 社

# 国学者平田篤胤

(一七七六～一八四三)

平田篤胤は近世後期の国学者の一人として歴史に大きな足跡をとどめております。近世中頃に、歌学から古典一般、和学などの学問も進展してきましたが、それに伴い神道を原点に日本古来の精神に帰り、見直そうとする学問が起りました。それが、荷田春満・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤を中心としてひき継がれ形成されてきたのが国学でした。この四者を称して国学の四大人といっています。

篤胤は安永五年一七七六に久保田城中谷地町(現秋田市)で佐竹藩士大番組頭大和田家の四男として生まれました。幼少の頃は、武士の家柄とはいってもけっしてめぐまれた環境ではなかったらしいが、やがて寛政七年一七九五二十歳に強い志をたてて江戸に出たのです。苦学力行を極めて寛政十二年二十五歳の時に、松山藩士平田藤兵衛篤穂の養嗣子となり平田姓を名乗り平田半兵衛篤胤となるのです。享和元年一八〇一二十歳の時に織瀬を娶り、生涯で二男一女をもうけますが、成人したのは長女のみでした。享和三年一八〇三二十八歳に最初の著書『呵妄書』を著わし、国学に強い関心をもつようになりました。この頃、本居宣長歿後の門人となり、宣長を生涯の師として、その国学継承を強く懐いてきたのでした。

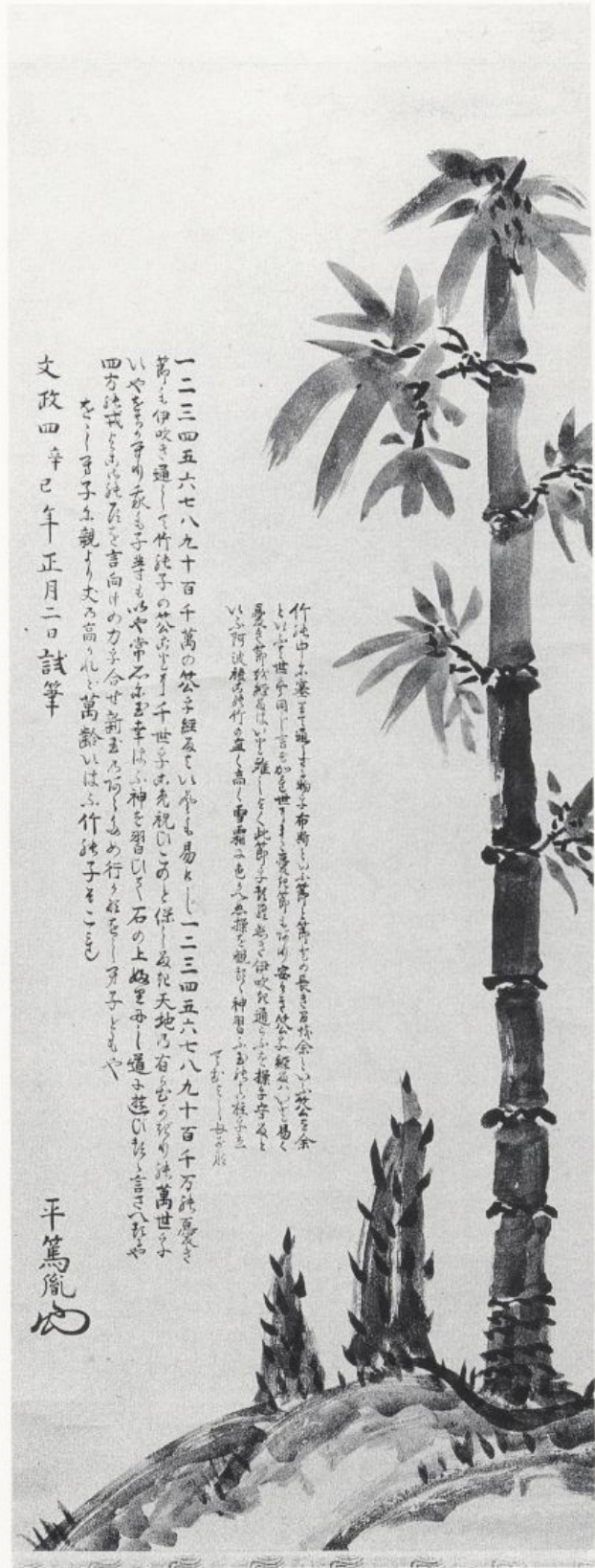
苦しい生活の中でも学問を捨てずに励み、和・漢・洋の書籍を讀破して、ついに平田古道学といわれる国学の発展を成し遂げたのであります。文政七年一八二四四十九歳には長女に養子鐵胤を配し、後継者となります。篤胤の学問は、文化五年に神祇伯白川家から神祇学頭職に任じられ、その後にも吉田家から古学教授を依囑されたり、さらに、著書は天覧の栄を受けるなどその名声は全国に及びました。

その学問と思想は農村に至るまで広く受け入れられ、門人五五三人、没後にもその跡を慕い一三三三〇人余りの多くが名を連ねています。天保十二年一八四一六十六歳の時に、次第に幕府は篤胤を忌避していたのが、突然の国許帰還の幕命により郷里秋田へもどり、天保十四年一八四三六十八歳でこの世を去ったのです。









竹は中一寒三葉すも物子布為し小葉と節の長き節余といふ公を余  
 といふ世を同じ言を如を世すも愛は節も有り客も公を經あしと易く  
 夏を節の節ははく難くをく此節子に節は節を伊吹能通るを種子守るも  
 以て阿波根の竹の節は高く節霜も也之を節を廻りく神用ふるは種子也  
 下むと母の胎

一二三四五六七八九十百千萬の竹子経てもいふも易くし一二三四五六七八九十百千万の竹子  
 節も伊吹き通して竹の竹子の公もすも千世子も先祝ひのと保て天地は存もむの節も竹萬世子  
 いやさるも守りて秋も子守もゆや常石も玉幸は神を習ひて石の上の節も守りて道も節も言は八節  
 四方に式も竹の節を言向けの力も合せし節も何くもめ行を節も子守りともや  
 せり子守りも親より文も高りれと萬節いはは竹の竹子もこと也

文政四年己午正月二日試筆

平篤胤

2 平田篤胤竹画讚  
 秋田市・佐々木チ工氏蔵



4 硯筆箱  
東京都・平田神社蔵

3 文机  
東京都・平田神社蔵

87 烏帽子  
秋田市・彌高神社蔵





6 平田篤胤肖像  
京都府・伏見稻荷大社藏



5 神代御系図  
雄和町・齊藤壽胤氏藏

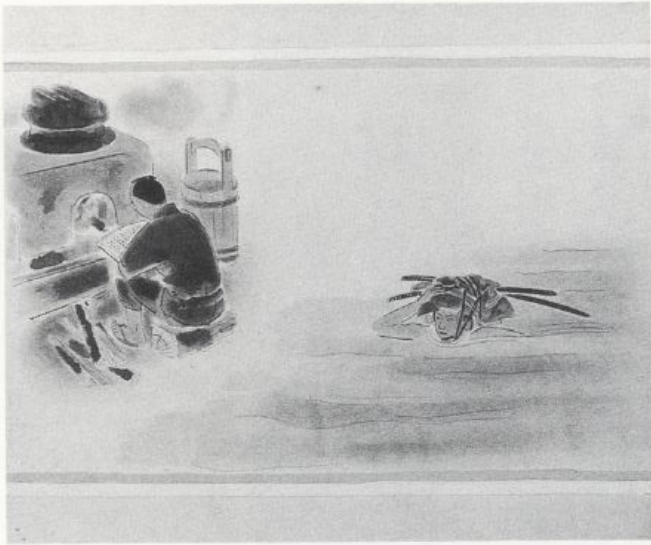


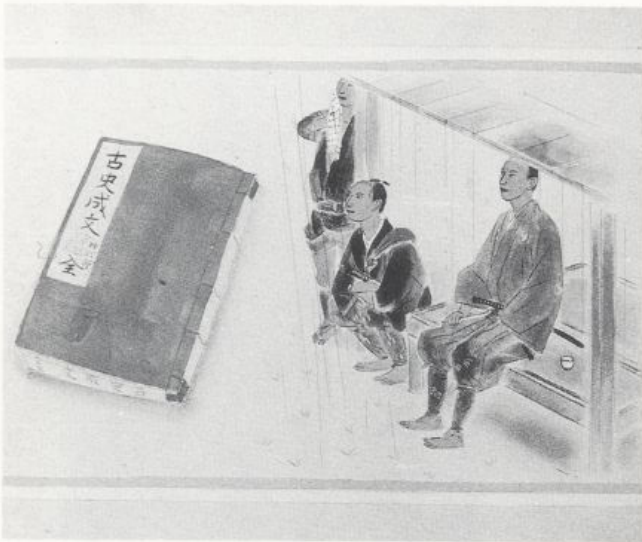
口演

此節割して著述を急ぐ  
有學用の窮理諒の外世俗  
無用の長談法用捨て下り  
生とくとも學事疑問は外  
呼ぶべき程さるべきは在義  
論辯の事母終る終る終  
夜は長談うとも少く厭  
ひなきこと事

篤胤

未  
五月





8 篤胤伝記絵  
秋田市・彌高神社蔵

6	5	2	1
8	7	4	3



平田篤胤先生肖像裏面  
 秋田縣令石田英吉殿



戊申秋  
 十五歲羽生氏書寫

9 平田篤胤先生肖像  
 八竜町・金子久男氏藏

平田神社建築祭祀願

當地出生故平田篤胤翁在世中大道之衰廢歎其師本居翁遺志ヲ繼キ盛ニ  
 敬神尊王大義ヲ唱ヒ子思萬考碎身粉骨一千餘卷ヲ著述シ衆庶ヲ教導シ後  
 古基ヲ闢キ偏ク天下ノ人民ヲシテ大義名分ヲ相辨シム其功績大ナル世人ノ知ル所ナリ且  
 明治戊辰、彼秋田藩勤王ノ列ニ加リ候ハ畢竟其餘蓋然シル所ニ依之本居翁ノ神靈共ニ  
 南秋田郡八橋村神社日吉神社ニ於テ春秋祭祀、際敬慎仰致未候然ニ處御一新來有功、神靈夫  
 御進祭被爲在候折柄故同志協議、永八橋村官有地内持借仕リ一小祠ヲ建築致シ平田神社ト  
 稱シ永世祭祀仕度別紙繪圖面ニ小祠雛形永續方法書相添此跋願上候也

明治十四年八月八日  
 秋田縣令石田英吉殿

平田篤胤先生肖像裏面  
 秋田縣令石田英吉殿

平田篤胤先生肖像裏面





孝徳大皇紀  
大詔申承  
よ字を

帝道唯一

あまねくも  
とせめやも人

小徑  
篤胤

11 平田篤胤短冊『帝道唯一』  
秋田市・彌高神社蔵

おもふを  
根元

今世は  
人もの道  
道興

あまねく  
とせめやも人

12 平田篤胤短冊『今の世に』  
秋田市・彌高神社蔵

木もふも花あり  
ていすはは  
結ぶうねり

花鳥字吾も衣を  
見たり安れと  
阿波才宅歌  
いと無  
集胤

13 平田篤胤短冊『花鳥を』  
秋田市・彌高神社蔵

打も  
あめ  
ほ  
う  
益荒雄  
あま  
歌  
知  
集胤

14 平田篤胤短冊『益荒雄の』  
秋田市・彌高神社蔵



言靈能多未久る百未に祝ひて与  
 少母千世為る神能らまも篤胤

15 平田篤胤短冊『言靈の』  
 雄和町・齊藤壽胤氏蔵

玉あまの御魂あまの  
 御魂あまの御魂  
 玉あまの御魂あまの

篤胤

玉あまの御魂あまの  
 御魂あまの御魂  
 玉あまの御魂あまの  
 玉禊の御魂  
 世に神祖  
 神乃幸ひ篤胤

16 平田篤胤短冊『玉禊』  
 西仙北町・菅原康輝氏蔵



老思ふ心  
 今  
 古神世の道  
 集胤

17 平田篤胤短冊『さかしらに』  
秋田市・大野整氏蔵

於くよむ後  
 物識といふは誰か言ふ  
 霊幸けふ  
 み代の后

18 平田篤胤短冊『物識と』  
大阪府・古神道仙法教蔵

皇國度制考  
けしきあり  
たすむる

人  
かゝる  
我々  
夜  
や  
根  
立  
思  
集  
胤

19 平田篤胤短冊『人はよし』

大阪府・古神道仙法教蔵

待  
春  
花  
集  
胤

春  
花  
集  
胤

20 平田織瀬筆篤胤和歌『春といえば』

秋田市・彌高神社蔵

玉鉾の道は去手をとる家  
之為日誌志けた人の人  
集胤

21 平田織瀬筆篤胤知歌短冊『玉鉾の』  
秋田市・平野政高氏藏

若思ふ心字人の  
と老とらひたると  
はかしく程予言拳ねせむいそ結のみ  
古知神世の道とえあら得  
篤胤

22 平田篤胤短冊『さかしらに』  
東京都・平田神社藏



木もふも花あり  
ていすはは  
誰より知らる

花鳥子香も衣花見とあれと  
何波才宅歌いど無  
集胤

23 平田篤胤短冊『花鳥を』  
秋田市・平野政高氏蔵

玉多皮  
たしめ  
そす

玉禰  
祈らぬ世に祖  
於や乃御祖の神  
幸はひ子集胤

24 平田篤胤短冊『玉禰』  
秋田市・小谷部繁氏蔵



皇國度制考  
けしきあり  
たすむる

人  
か  
我  
夜  
思  
篤胤

25 平田篤胤短冊『人はよし』  
秋田市・佐々木千工氏蔵

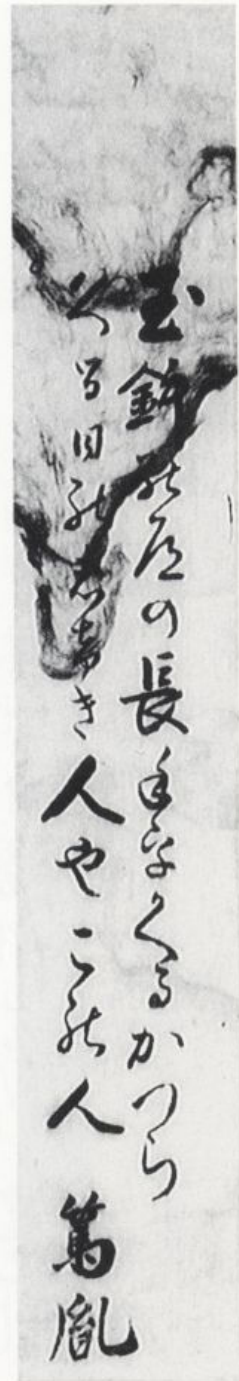
いふふふふふ  
思ふふふふふ

大  
朝  
篤胤

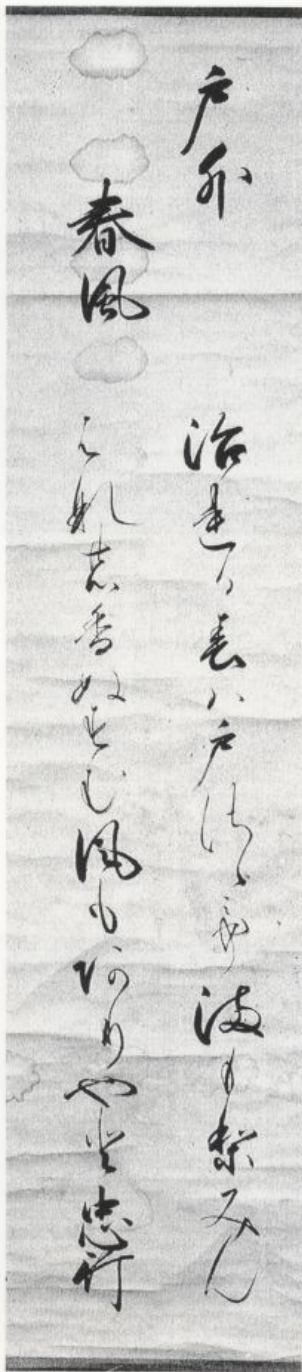
26 平田篤胤短冊『大そらに』  
昭和町・石川尚三氏蔵



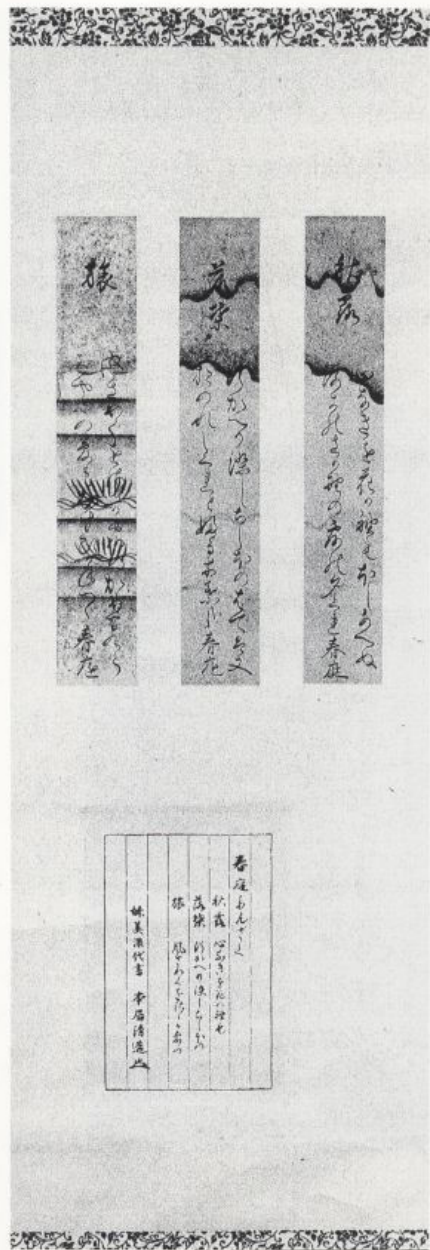
29 本居宣長『ひも鏡』  
協和町・物部長仁氏蔵



27 平田篤胤短冊『玉鉾の』  
秋田市・彌高神社蔵



31 吉川忠行歌書  
五城目町・渡辺彦兵衛氏藏



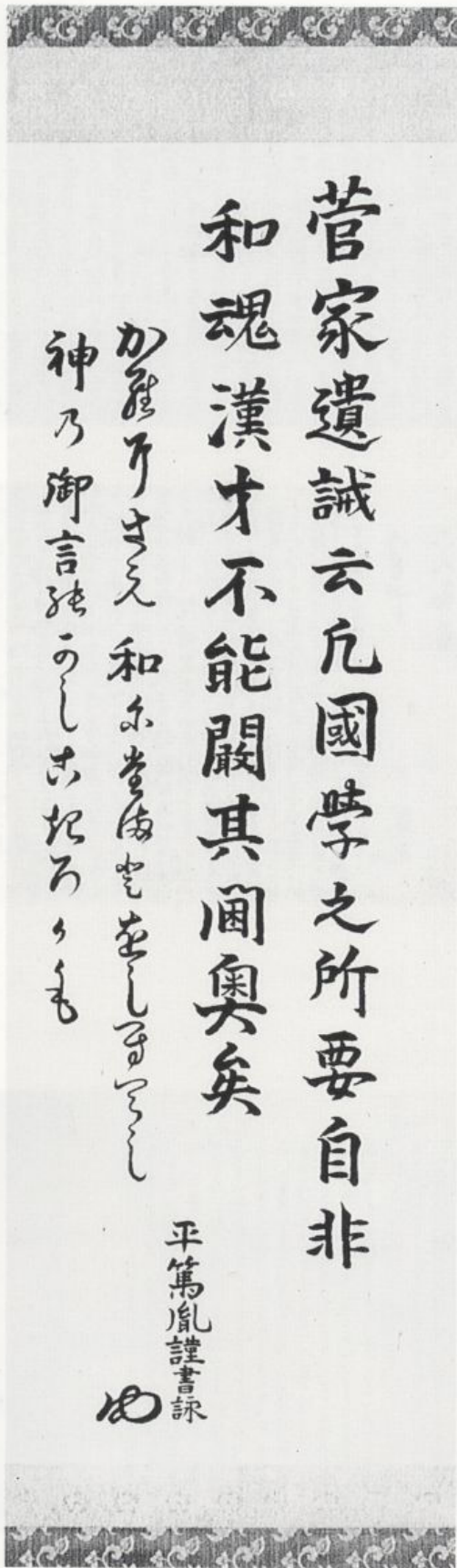
30 本居春庭短冊  
大森町・大友ヒサエ氏藏







33 篤胤肖像  
秋田市・彌高神社蔵



37 平田篤胤筆「和魂漢才」  
秋田市・佐々木子工氏蔵









41 氣吹乃屋大人像  
秋田市・彌高神社藏



40 神靈真柱大人神号  
秋田市・彌高神社藏

飢企都鄧利軻茂豆句志磨爾  
和我謂祢志伊茂播和素邏珥  
譽能據鄧馭鄧母

篤胤

42 平田篤胤和歌書  
秋田市・彌高神社藏

花鳥字吾之表冷  
見下八安水と  
阿波是也歌ふい  
と無五以利

篤胤

43 平田篤胤和歌書  
秋田市・彌高神社藏

五德說

敬 義 仁 智 誠

欽戒忌祗肅齋謹慎謙度  
 遜讓恭儉勤畏順共弟  
 理廉正直平公莊善純一  
 愿清白允信愨貞靖恒  
 敦厚厯篤誠周忠恕大和  
 孝友慈睦惠柔寬弘溫  
 達明察聰哲睿淵博簡齊  
 慧慮謀權敏聖神易時  
 果敢強愿毅剛武威桓栗  
 固烈發猛嚴厲節重立

愛稱 上神是也敬用純固不識不知道行而不教德有而無名至於  
 教化外通文籍通則始知有名教之方而其立名則物數見書傳未有  
 故紀今欲學者易知當而列之建為五類一曰敬人之所以事神也臣之  
 所以事君也子之所以事父也下之所以事上也所以其尊也所以勉  
 其事也其屬十九二曰義明以修身遠害不流於邪也所以正道則理動  
 無害也其屬十九三曰仁上之所以養下也人之所以群居和一也所  
 以親其親也所以濟世利物死而不朽也其屬十九四曰智所以別是非  
 明利害也所以自為謀所以必得也所以達理知命而不可  
 也所以觀天下變而事博聞多識也所以通機入神妙也其屬十  
 九五曰勇所以攻難堪若使事必成也所以見義忘利而無懼也所以  
 戰亂除惡與能處也其屬十九凡人之德行堪此五類者五名者舉一  
 以目其類耳非必統之也凡德舉於教立於教美於仁智以聞之勇以行  
 之是其次也然其類理則互相為德其交則融會無間敬以仁比  
 美與仁比智與仁比勇與仁比義與仁比智與義比勇與義比義與勇比  
 比者或相及或相類也各有其意不暇盡說學者思而得之可也  
 文化元年歲次甲子三月 大倉 平真庵誌

大 亦 貴 大 禎  
 少 彦 名 大 禎

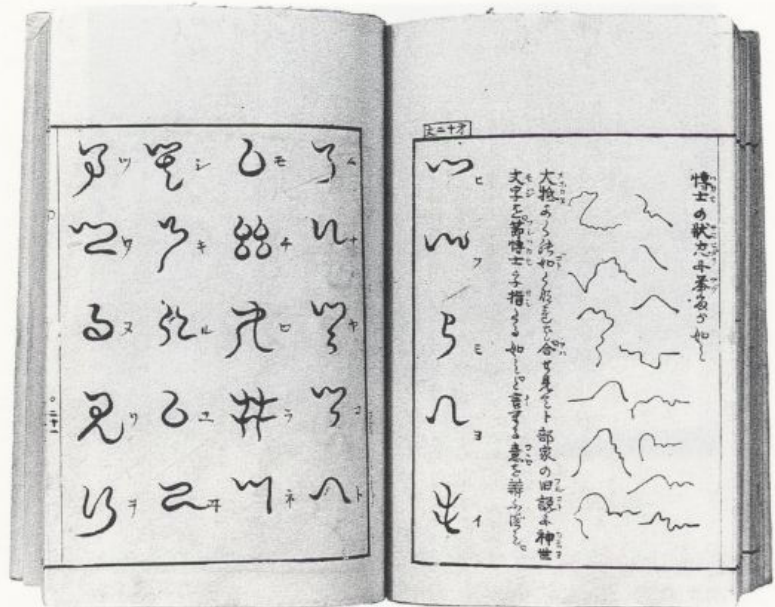
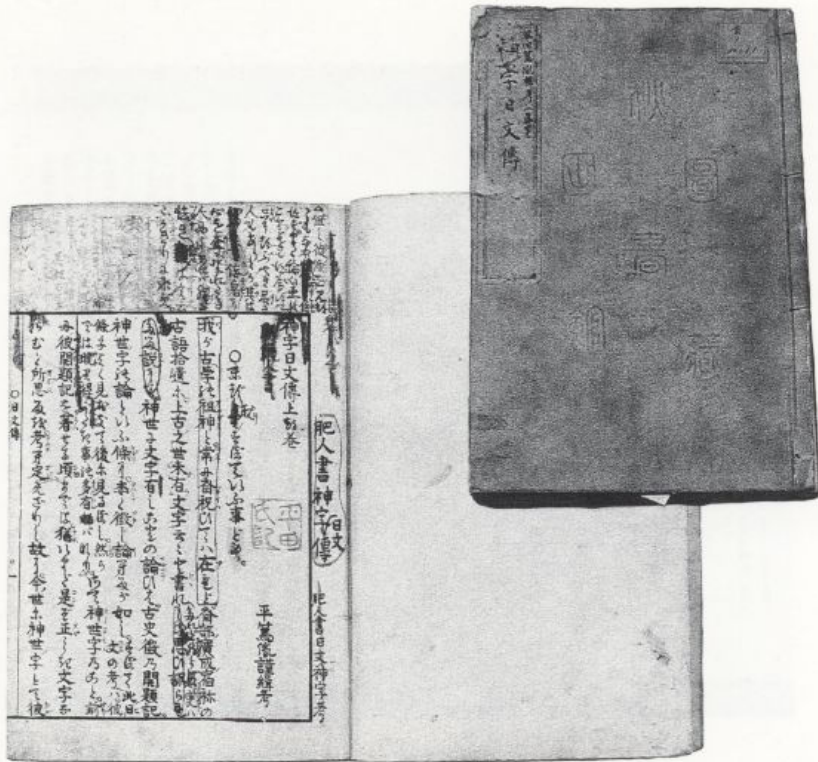
之國片之司之  
 和學二根非  
 及之乃多亦  
 第胤書

44 五德說  
 秋田市・彌高神社藏

45 医薬二神神号書  
 秋田市・彌高神社藏

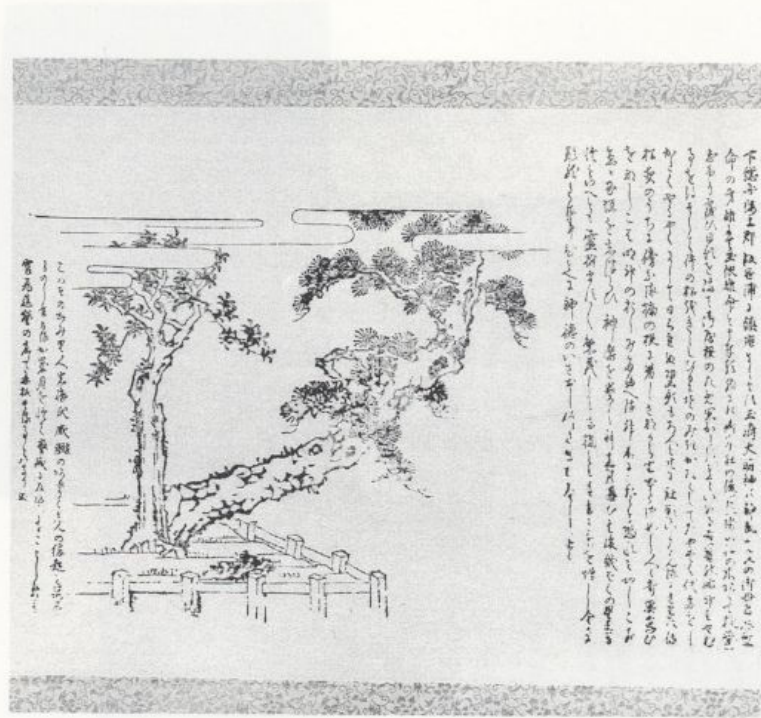






48 『神字日文傳』 平田篤胤自筆本  
秋田市・秋田県立秋田図書館蔵



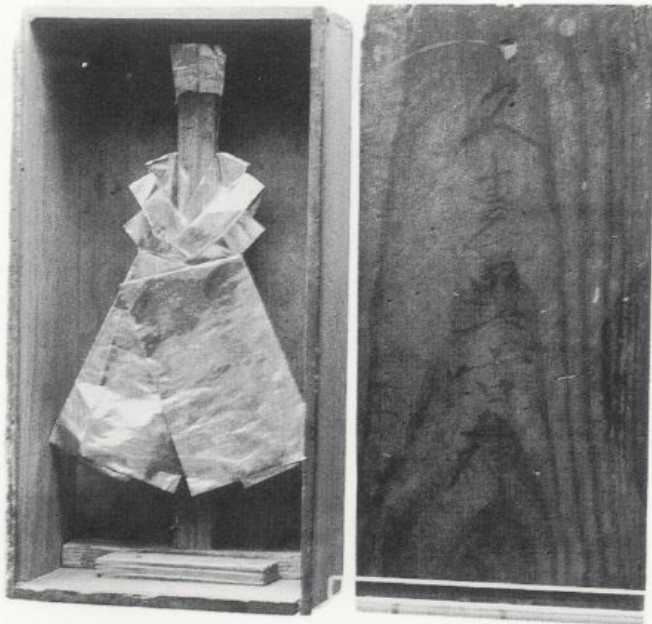


52 岩笛  
千葉県・熊野神社蔵

50 『磐笛能記』写本  
千葉県・玉崎神社蔵

49 御神木夫婦木之図  
千葉県・玉崎神社蔵





54 久夷毘古神靈  
千葉県・宮負克己氏蔵



53 平田篤胤久延彦画讃  
千葉県・宮負克己氏蔵



古語云此神者足雖不行

盡知天下之事神也

平篤胤

ほさし加保事此あるしは

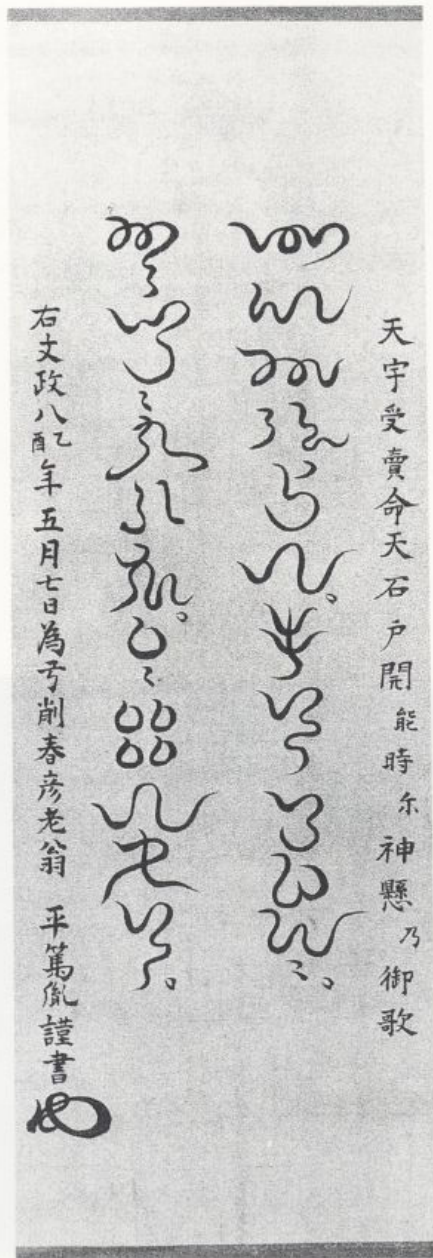
天の下は

物識人をやひさし

知れまし

男鏡胤謹書

平田鐵胤女



天宇受賣命天石戸開能時尔神懸乃御歌

右文政八年五月七日為子削春彦老翁

平篤胤謹書

55 平田篤胤日文字書

秋田市・平野政高氏藏

56 平田鐵胤筆織瀬画『久延彦図』

秋田市・平野政高氏藏





57 『大扶桑國考』 版木

秋田市・秋田県立博物館蔵



大扶及因考此首小

平篤胤

日むかしは

大樹の本乃

神のまじ

よめれ本草の

言や来て関け

言霊持多勢久毎万尔 篤胤

後祝ひてよ

かきかへ千世

神承らたまえ

あめりちよひ  
ゆるむすまひ  
ゆあゝ世ふ  
うるちよひ  
とつせうあ  
乞親地愛道

重胤

58 平田篤胤和歌書

協和町・物部長仁氏藏

59 鈴木重胤和歌書

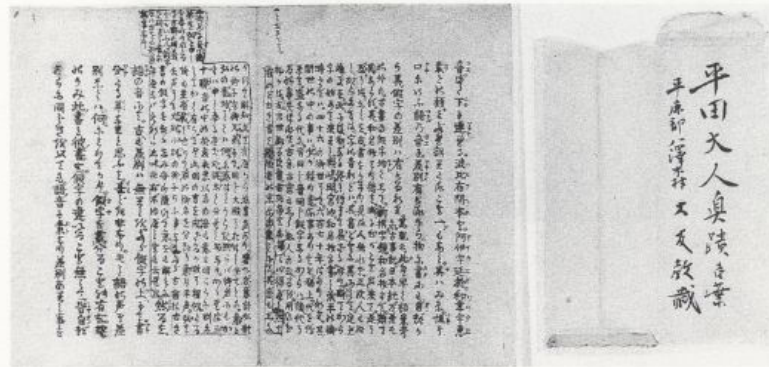
協和町・物部長仁氏藏

60 平田篤胤書『言霊の』

秋田市・秋田市立千秋美術館藏







- 63 平田篤胤書『惟神』  
大森町・大友ヒサエ氏藏
- 64 平田篤胤稿本断簡  
大森町・大友ヒサエ氏藏





新儀多年古道學精鬼仕進之教十の  
 著述書もよく先年上末仕佐右  
 著述去 林市中歳有秋上。天覧見  
 感之平章蒙勅許を以儀多もよく  
 不け反右等。次有及河内中諸  
 曲上之其化規模小お威儀もよく可  
 申之此作付委知を中上作。文政六  
 上末仕佐富小跡治部卿様之位自國郷  
 御事之弟有より古道學以の業。事

授與平篤胤雅叟  
 授與目錄  
 ○大元尊神之傳。成神傳。筆添  
 之傳。神道一統之傳。神戒三大事  
 天下雙敵之傳  
 右條之口訣。天神之御傳令授與畢  
 文政六未十月十日 長公花押  
 平篤胤雅翁  
 ○當公有様事西九。以為入の長天保元年  
 の頃奥女房所秘筆織江中。有より海法  
 五。初著述。書名。存稿。子。中。及。以  
 分。之。孫。稿。之。所。月。白。縮。編。必。定。格。領。任。任  
 傳。右。織。江。中。女。房。之。秘。門。人。御。期。定  
 小。治。秘。那。友。之。仁。叔。母。而。之。右。子  
 節。之。由。因。海。法。之。事。以。成。○  
 文。政。八。年。頃。東。叡。山。宮。採。御。乳。母。  
 女。房。也。進。之。有。子。息。豐。田。正。親。弟。  
 仁。兼。之。慈。志。仕。以。其。方。より。私。著。述

67 『平田大覚自蹟』写本  
 昭和町・石川尚三氏藏







荷田宿禰朝倉大人

常みかよ侍やは  
何れも漢島の跡子  
見ゆのみ人れ道く

秋津彦瑞樞根大人

師木崎乃山跡  
まろ寝人とは  
朝日よまほふ  
や万揚花

賀茂縣主國郡大人

死守よとみ弁先で  
造れるま本柱  
きてし心を  
勤り糾らほし

神靈能真柱大人

雲とねまはる八雨せぬ  
ふで志たて神代の道子  
身もやむくは年  
平鏡胤謹言



69 四大人畫像

京都府・伏見稲荷大社蔵

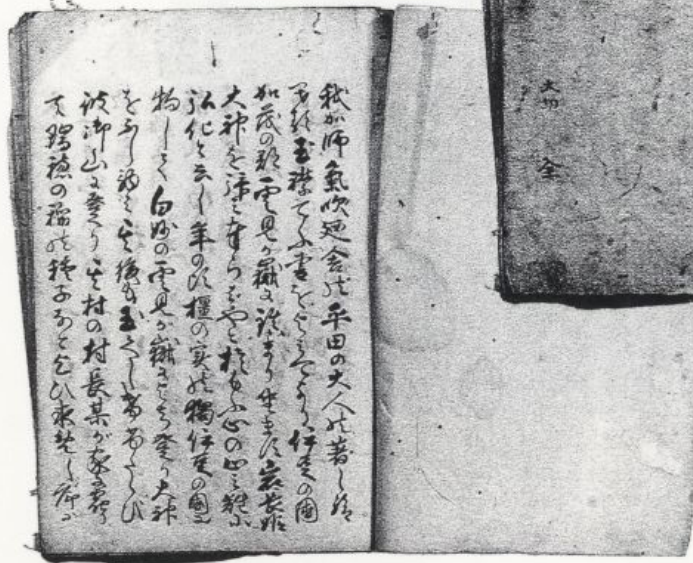




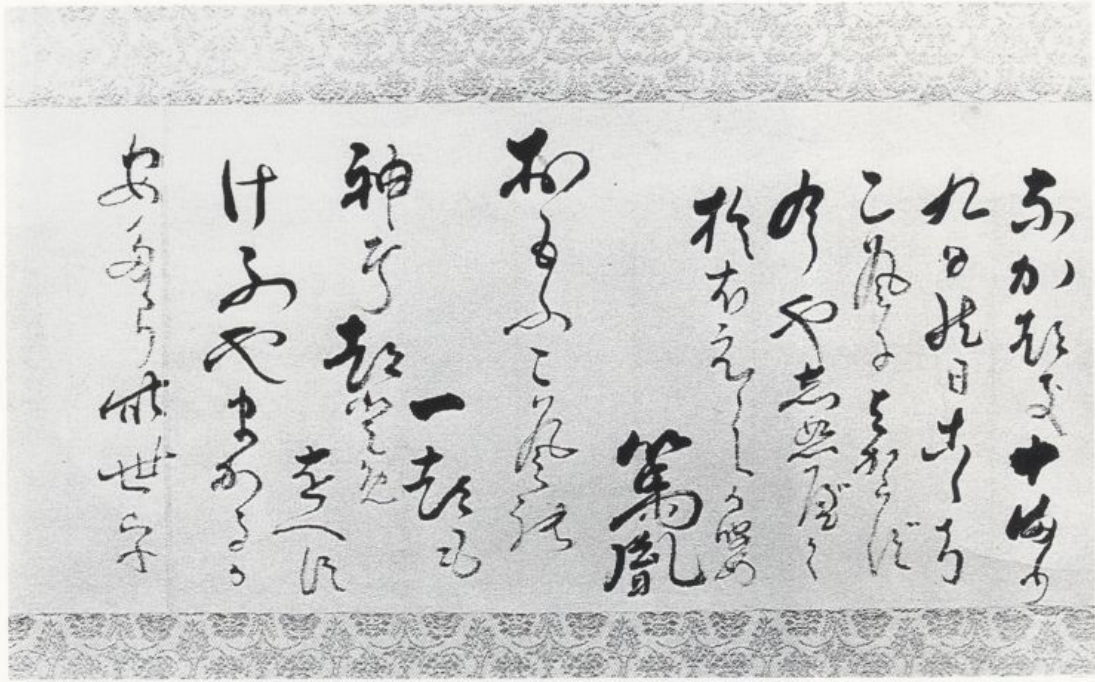








77 『疱瘡除富草考全』  
千葉県・宮負克己氏藏



79 辞世

東京都・平田神社蔵





81 平田篤胤大人肖像  
秋田市・彌高神社蔵

荷田大人 秋津彦美豆櫻根大人  
 縣居大人 神靈能真柱大人

平鐵胤齋謹書

82 四大人神号  
 秋田市・彌高神社藏



83 篤胤稿本断片  
 秋田市・彌高神社藏



加良 倭良 父良 和良 古良  
此行の五色其母讀と爲りて丹入を聲事起る其母  
を色父と父流理と云とる色和ハ和礼理と云とる色古  
身古己理と云とる色古ハ六ハ小ハ是行ハ五色五純  
衆王和ハ父例の合口言ハ父流下云の出来と云り

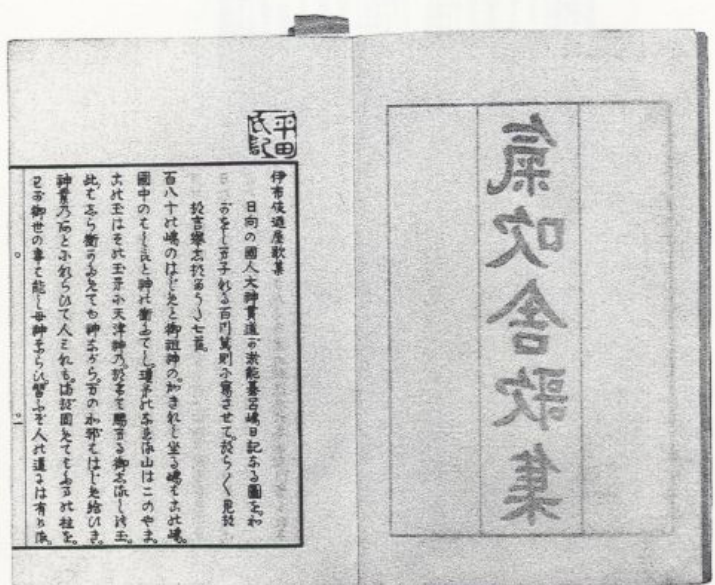
加良 倭良 父良 和良 古良  
加良 倭良 父良 和良 古良 丁是を知りて加良  
加良 倭良 父良 和良 古良 其初章二十五言此  
加良 倭良 父良 和良 古良 詳かく詳如し此章  
加良 倭良 父良 和良 古良 三純父流の合口言  
加良 倭良 父良 和良 古良 形を其合口言  
加良 倭良 父良 和良 古良 神を其合口言  
加良 倭良 父良 和良 古良 神を其合口言

此行の五色其母讀と爲りて丹入を聲事起る其母  
を色父と父流理と云とる色和ハ和礼理と云とる色古  
身古己理と云とる色古ハ六ハ小ハ是行ハ五色五純  
衆王和ハ父例の合口言ハ父流下云の出来と云り  
を起り始ハ此流理と云とる和良古と云とる和良  
加良 倭良 父良 和良 古良 三純父流の合口言  
加良 倭良 父良 和良 古良 形を其合口言  
加良 倭良 父良 和良 古良 神を其合口言  
加良 倭良 父良 和良 古良 神を其合口言

古語云此神者足雖不行  
盡知天下之事神也  
阪さか依事志多しは  
天の下に  
物識人やぬひす  
知深きし



平賀麻鹿護画像

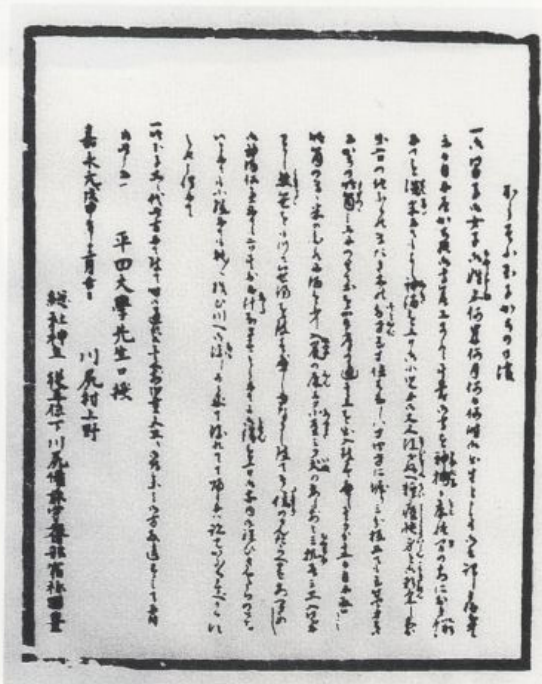
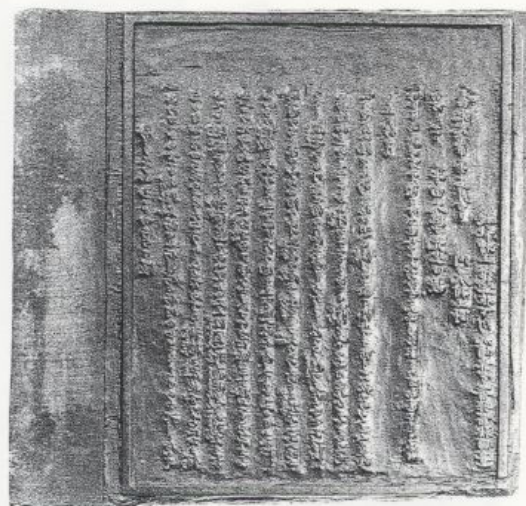


伊香俊彦歌集  
日向の國人大神算道可求能事古嶋日記ふる圖云わ  
る可なり古子れる百門算則分算させて彼らに  
較言集志於らりて七言  
百八十嶋のはじ先と御座神の知されと坐る嶋そよ此嶋  
圖中のそよ先と神は算して理事此各各山はこのやま  
大杖玉はそよ玉小天津神乃貯るを懸言る御座保し内玉  
此そよ爾可あえて御座つら言の加邪とては先地ひき  
神皇乃而と小ぢらひて人それも御座圖免てもるれば柱を  
足す御世の事と能く神事らひ言やを人れ道は有り依

90 久延毘古画像  
秋田市・笹村良成氏藏

91 「氣吹舎歌集」  
雄和町・齊藤壽胤氏藏

86 篤胤稿本断簡  
秋田市・彌高神社藏

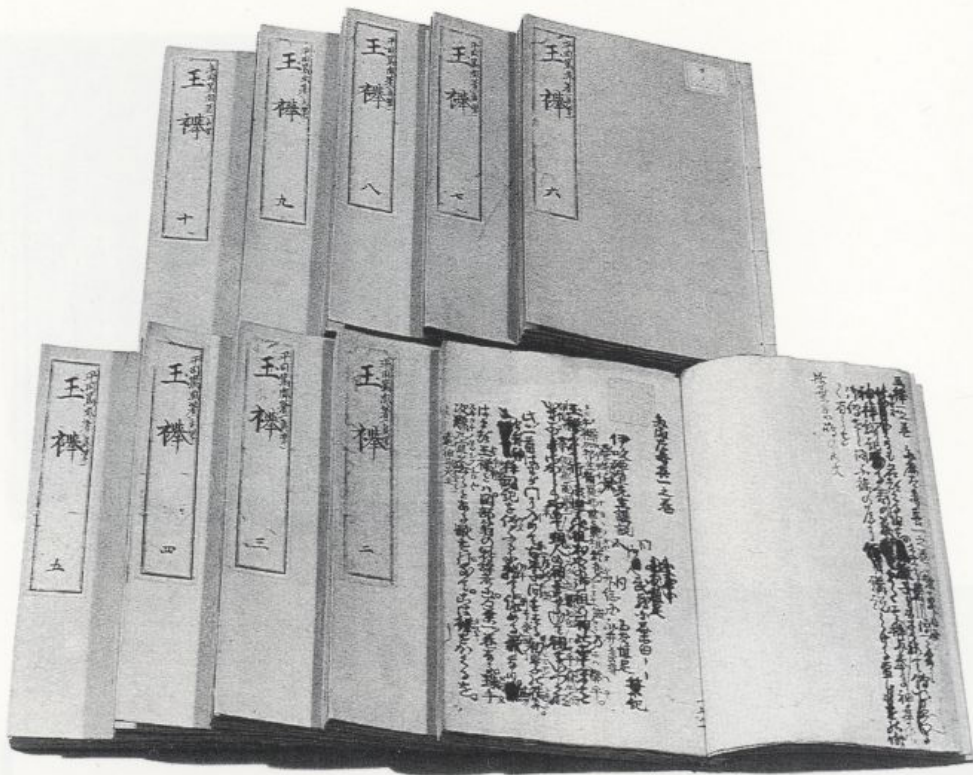


92 口傳禁厭法版木  
同刷本紙  
秋田市・総社神社蔵



93 篤胤大人胸像  
秋田市・明德小学校蔵





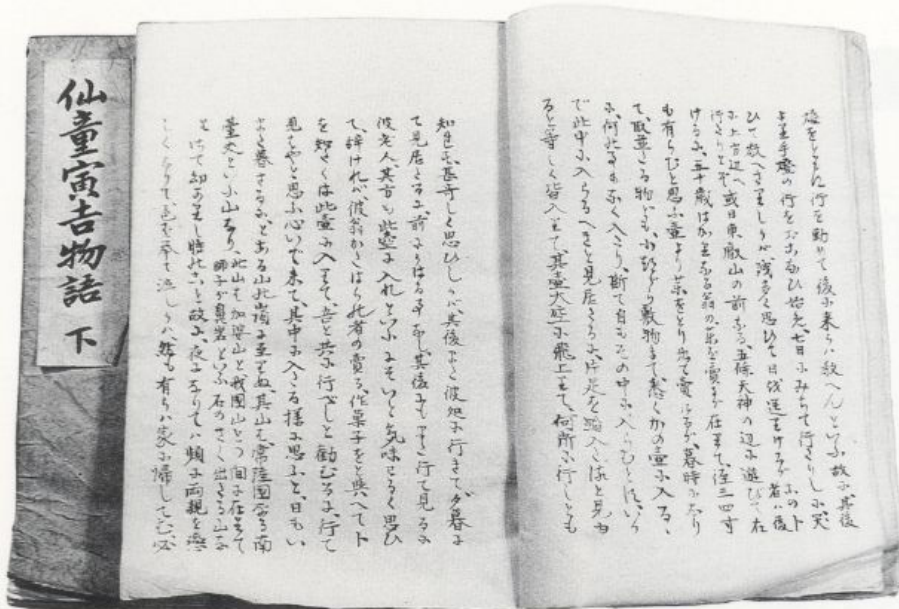
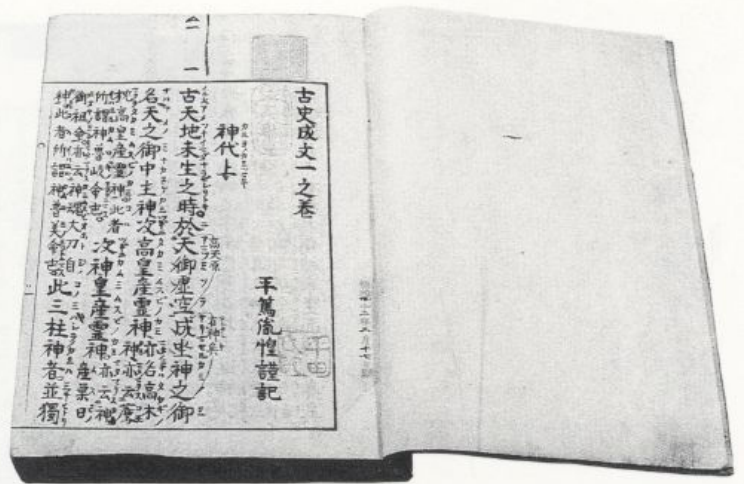
99 96

著作稿本類

『玉禪』自筆本

『印度蔵志』自筆本

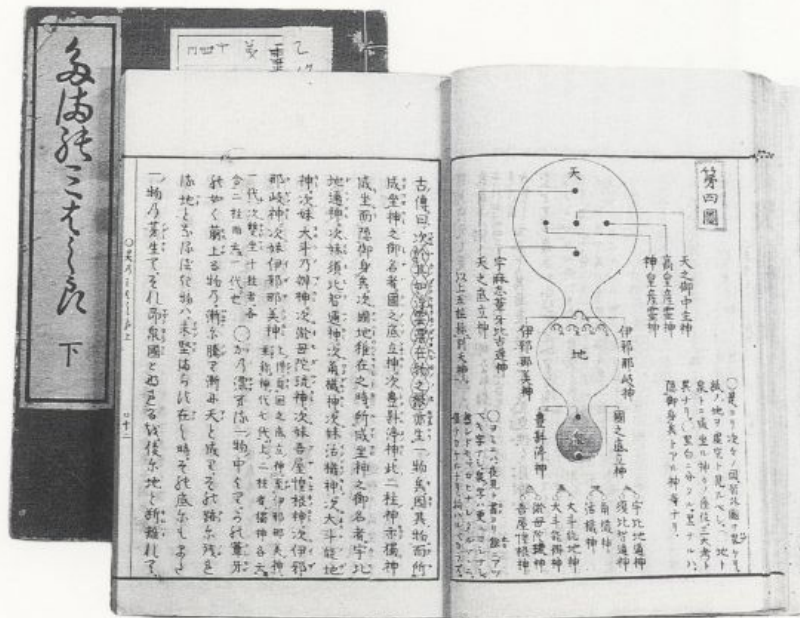
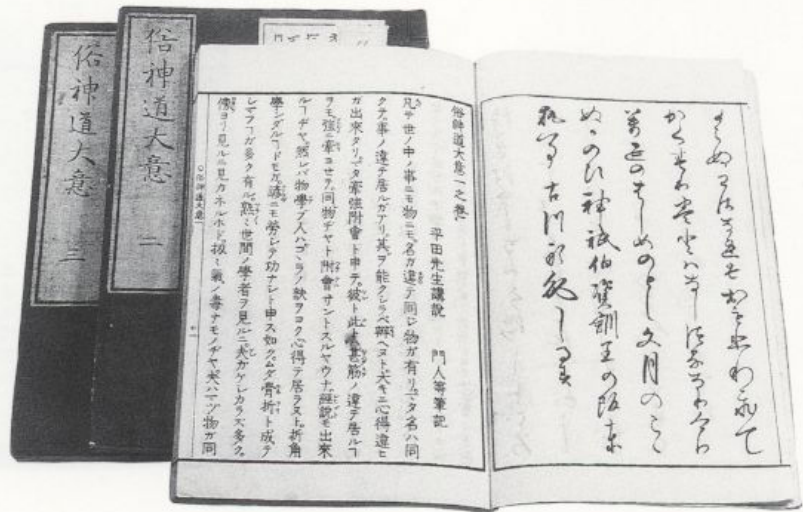
秋田市・秋田県立秋田図書館蔵



102 『仙童寅吉物語』写本  
秋田市・秋田県立秋田図書館蔵

95 『古史成文』板本書入自筆  
秋田市・秋田県立秋田図書館蔵





105 『靈能眞柱』 版本

秋田市・秋田県立秋田図書館蔵

103 『俗神道大意』 版本

秋田市・秋田県立秋田図書館蔵



108

著作版本類  
秋田市・彌高神社藏



平田篤胤肖像

先生子元通稱大角孫何吹乃余出村秋内之人也  
 出内之僧學厚慕諸君不獨門徒既多後其志  
 于其處者亦不鮮稱其門人曰通立一系之大見其意  
 況在吾輩者猶然且其會同由内川學業之士懷慕其  
 德年一歲益為甚矣其意既極其心一乃一乃  
 其心我之親也世初為師其子初安可哉一人之師  
 而一學之師也其心其意其志其行其言其行其言  
 其心其意其志其行其言其行其言其行其言其行其言  
 嘉永五年二月一日 平田篤胤 謹記



111 平田篤胤肖像  
 秋田市・彌高神社藏

大枝宗國考曰  
 はしき  
 日かか  
 大樹の本に神々  
 木亭乃言や  
 篤胤



110 平田篤胤肖像  
 秋田市・高堂五郎氏藏



113

平田篤胤父子像  
秋田市・彌高神社蔵

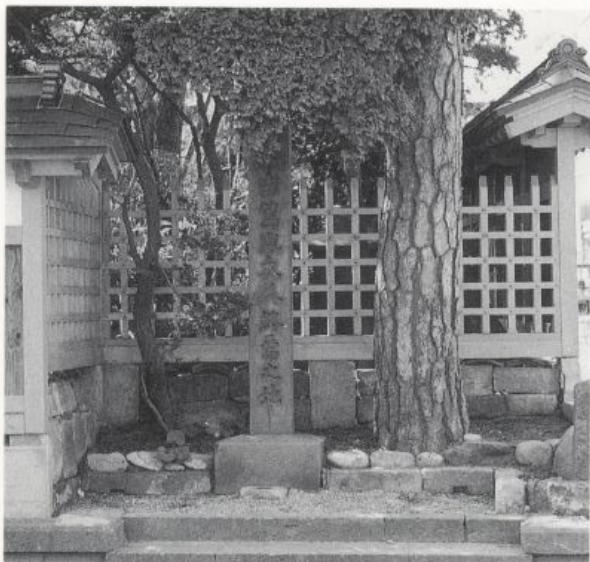


112

平田篤胤肖像  
秋田市・川尻弥太郎氏蔵







- 119 奥津城（奥墓）
- 118 終焉の地碑
- 117 生誕の地碑
- 116 雷風義塾の碑



■ 凶集目錄・解説 ■

凡一冊  
一、凶集の成立と編纂  
二、凶集の分類と整理  
三、凶集の本文と注釋  
四、凶集の本文と注釋  
五、凶集の本文と注釋  
六、凶集の本文と注釋

凡 例

- 甲、本図集は秋田市立赤れんが郷土館において共催した『秋田の先人・平田篤胤大人展』の図録を基本資料として編さんした。(平成元年九月十日から二月間開催)
- 乙、本図集に掲載できなかった資料は解説で細字をもって収載した。
- 丙、本図集作成には齊藤壽胤・中田好彦・佐々木榮孝があたった。



1 夢中対面図 絹本彩色軸装 一点 本居春庭讚 (35.0×55.2) 東京都・平田神社蔵

平田篤胤ぬしの年ころ道に/心さしふかくてわか故翁のあら/ハされたる書ともを明くれ/見つつ深く信じていかて対面/セハやおもひわたられつるを/道のほと遠くかつは心に/まかせぬ身にてつひにその/ことなくてやミぬること、つねに/くちをしう思ひためるに/去年の三月の末つかた夢に人の/来てこのころ鈴屋の翁のここ/にもものせられてありつるか今/なむかへられしと告げるに/おとろきてとるものもとり/あへすただいそきに急きて/おひ行けるにからうして/品川といふあたり追しきて/まつおもふころのかたはし/うちかたらひなとしてをしへ子/の數に數へなむくははり/ぬると見たりつるはかつかつも/年ころ願ひつるほいかなふこことち/していとうれしう思ハける/ままになおゆく末長くしのふたより/にもとやかてその有つるさまを/うつさせてこれに野よみて書くはへてよとあるに

わたつみの深き心のかよひてや/そこには見えし人の面影

夢にてもかかると見るめを潜きつる/ちきりハふかき春の海つら/春庭 /書院後源清印

2 平田篤胤筆竹画讃 紙本墨画軸装 一点

秋田県指定有形文化財 (124.0×50.0)

秋田市・佐々木チエ氏蔵  
竹の中に塞りて通らざる物を布斯といふ節と節との長き間を余といふ筈を余/といふは世と同じ言ぞかれ世にまた憂き節もあり安けき筈を経るはいと易く/憂き節を経るはいと

難しよく此節をつらぬき伊吹き通らふを操を守ると/いふ阿波礼この竹の直く高く雪霜に色かへぬ操を窺つ神習ふ玉の真柱を立/てむよしもがな/一二三四五六七八九十百千萬の筈を経るはいとも易けし一二三四五六七八九十百千萬の憂き/節も伊吹通して竹の子の筈こと千世をこめ祝ひこのとほしるき天地の有らむかぎりの万世を/いやをちかへり我も子等もいや常石に玉幸ふ神を習ひて石の上ふりにし道に遊びつつ言さへづるや/四方の戎よこさの道を言向の力を合せ新玉のあらため行かなをしへ子ともや/をしへ子に親より丈の高かれと萬齡いはふ竹の子これ/文政四辛巳年正月二日試筆/平篤胤(花押)

3 文机 遺品 一点 (49.8×87.6×28.5) 東京都・平田神社蔵

4 硯箱 五段硯筆墨他入 遺品 二八点 (28.5×16.5×2.5) 東京都・平田神社蔵

5 神代御系図 紙本板木刷軸装 一点 (113.0×52.6) 雄和町・齊藤壽胤氏蔵

6 平田篤胤肖像 絹本彩色軸装 忠敬筆 一点 (121.3×51.0) 京都府・伏見稻荷大社蔵

7 平田篤胤筆「口演」 紙本墨書軸装 一点 (31.0×35.8) 五城目町・渡辺隆太郎氏蔵

口演/此節別して著述取急起に/付学用窮理談の外世俗/無用の長談御用捨可被下候塾/生といへども学事疑問の外/呼ことなくば来べからず道義/論辯の事に於ては終日終/夜の長談たりとも少か厭/ひ無之候事/未五月

8 篤胤伝記絵 色紙装彩色 高橋万年筆 八

点 (24.0×28.2) 秋田市・彌高神社蔵

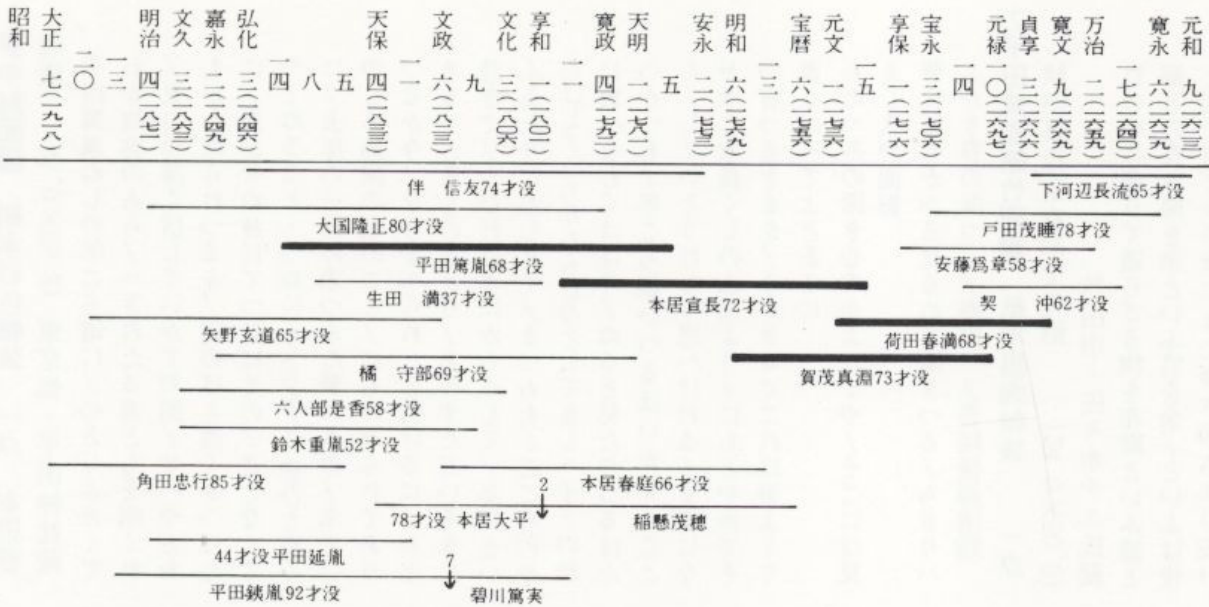
[1] 篤胤は皇紀二千四百三十六年(安永五年)今の秋田市に生れた。幼名は正吉、父は佐竹藩の家臣で大和田祚胤といった。正吉は幼くして読み書きに親しんでいたが、尊皇の学者淺見綱齋の学を継ぐ中山菁菫について八歳の頃から漢学を学んだ。二十歳の一月、正吉は郷里を出た。江戸で勉強しようというのである。懐中には兄から貰った錢百文があるだけ。一月八日に家を出た者は一生戻らないといわれるその八日の寒い朝であった。ふりかえってみる吾家は未だ雪の中に眠っていた。

[2] 家を出て十幾日目、江戸が近くなったある日、一つの渡し場にさしかかった。もう錢は無い。船頭に頭を下げて渡して貰えまいかと頼んだが、すげなくはねつけられた。正吉は憤然その場で素裸となり、衣服大小は頭の上にしぱりつけ、冷水肌を刺す冬川にざんぶと飛び込み、あわてて何か叫びかける渡守の声を後に、抜手を切つて向う岸へ泳ぎわたった。江戸では火消人夫となった。荷車引きになった。家庭教師にもなったし商家の炊事番にもなった。変らないのは向学の一心だけだった。苦学五年、廿五歳の時備中松山藩の武士平田藤兵衛の養子となり、名を平田半兵衛篤胤と改めた。

[3] 「破いてしまうのは惜しい気が致しまして」屑屋から買った反古の中に、余り汚れていない一冊の本を見つけた夫人はこう言つて篤胤の所へ持って来た。之は本居宣長の古事記伝であった。皇国の尊嚴を明かにした古事記伝は、廿六歳の若き篤胤の胸に新しい火を点じた。宣長先生から直接教えを受けた



国学者略年表



という絶えざる念願が凝ってか、篤胤は宣長先生と対面して入門の許しを得た夢をみた。覚めてから伊勢の宣長へ入門願の手紙を書いたが、届かぬ前に、宣長は此の世を去っていた。

4 廿八歳の時『呵安書』を書いて以後出した本数種、平田篤胤の名は次第に高くなった。篤胤三十七歳の歳、内助欠ける所なかった夫人は八歳と五歳の子供を残して病死した。平常剛毅の篤胤も、妻を思い子を思って、世の憂き事が一時にきたといつて嘆いた。篤胤の学識は深く且つ広かったが、窮極するところ「日本の道」を明らかにするにあつた。神道の人たる篤胤が六千七百七十一巻の一切経を三回も繰返して読んだ情熱もここに発していた。「すめらぎの道唯一つこをおきてあだし小徑によらめやも人」篤胤

5 千枝子はお雛さまを飾ってもらって手をうって喜んだ。娘の節句を祝ってやりたいばかりに、唯一枚の自分の羽織を代りに買って買ってきたお雛様である。貧しい中で育つ母なき二人の吾子をしばらくは隣室から見ている。同郷の佐藤信淵は既に名のある学者であつたが、篤胤の「靈能真柱」を読んで、すすんで篤胤の門下となつた。篤胤と信淵は夜を徹して世界の大勢を論じ、神国日本の無比の国体を語つた。「青海原潮の八百重の八十国につぎてひろめよこの正道を」篤胤

6 篤胤四十八歳の夏、著書献上の為京都へ上つた、大津で凄じい夕立にあつた。「この大雨は天の禊である、大君のまします京に入る前に旅の汚れを洗い落すことが出来るのは意義

深いことだ」茶店に雨宿りして篤胤の心ははればれとしていた。『古史成文』『靈能真柱』等の献上手続きをした篤胤へ、間もなく御嘉納の事と「天覧睿感」の印を使用して差支えないとの勅許を賜つた旨が伝えられた。

7 師が眠る山室山は静かだった。夢中の入門以来廿一年目、京都から伊勢へ廻つた篤胤は、日頃敬仰する本居先生の墓に詣でた。門人は全国に増えていた。篤胤はいよいよ国学に専念した。その頃英国船が来て通商申込みをするなど、対外的に日本は重大な時期に際会していたのである。篤胤の学問は幕府に容れられず天保十二年一月、著述差留、国許へ退去を命ぜられた。「江戸で広めた学問を今度は秋田へも根を下そう。」出郷して四十余年、一度も帰つた事のない古里へ旅立つた。

8 篤胤の帰国を最も喜び迎えたのは青年達である。争つて篤胤の講義へ集つた。それから三年、短い月日ながら郷党に与えた思想的影響は深いものがあつた。胃腸を害した篤胤は六十八歳で逝いた。天保十四年(皇紀二千五百三年)閏九月である。大政維新にあつて篤胤の門人の多くは明治建設の先鋒となり、奥羽の藩中では秋田が勳皇の大幟を掲げて起きた。

9 平田篤胤先生肖像 紙本彩色軸装 一点  
羽生氏秀筆写 (128.0×41.5)

雲となりあるは雨ともふりしきて/かみよの道に身をやつくさん/戌申秋日/十五歳羽生氏秀謹写

(裏面) 平田神社建築祭祀願/当地出生故



- 平田篤胤翁在世中大道之衰廢を歎き其師本居翁の遺志を継ぎ盛に敬神尊王の大義を唱ひ千思萬考碎身粉骨一千余卷の畫籍を著述し衆庶を教導して復古の基を開き偏く天下の人民をして大義名分を相弁しむ其の功績の大なる世人の知る所なり且明治戊辰の役秋田藩勤王の列に加はり候は畢竟その余蔭の然らしむる所に候依之本居翁の神靈と共に南秋田郡八橋村泉社日吉神社に於て春秋祭祀の際敬慎信仰致来候然る処御一新来有功の神靈夫々御追祭被為在候折柄故同志協議の末八橋村官有地内拝借仕り一小祠を建築致し平田神社と称し永世祭祀仕度別紙絵図面並に小祠雛形永続方法書相添へ此段願上候也/明治十四年八月八日/南秋田郡大町三丁目山中新十郎/同船大工町針生源太郎/同茶町扇ノ町桜田誠一郎/同手形谷地町羽生氏熟/日吉神社祠官権中講義小谷部甚左衛門/秋田県令石田英吉殿
- 10 佐藤信淵先生肖像 紙本彩色軸装 一点  
羽生氏秀筆写 (87.7×44.5)
- 11 平田篤胤短冊「帝道唯一」 短冊装 一点  
(36.1×6.0) 秋田市・彌高神社蔵  
孝徳天皇紀の大詔命によりて  
帝道唯一 こをおきて佗し小徑に  
よらめも人 篤胤
- 12 平田篤胤短冊「今の世に」 短冊装 一点  
(36.2×6.0) 秋田市・彌高神社蔵  
おもふ旨ありて根岸といふさといへ居  
をうつすときによめる  
今の世にひく人もなき道奥の  
あたら真弓張らすも在なむ 篤胤
- 13 平田篤胤短冊「花鳥を」 短冊装 一点  
(36.2×6.0) 秋田市・彌高神社蔵  
おもふむねありていまのはしらにかきつ  
ける  
花鳥を吾も哀と見てハあれと  
あはれと歌ふいと無りけり 篤胤
- 14 平田篤胤短冊「益荒雄の」 短冊装 一点  
(36.2×6.0) 秋田市・彌高神社蔵  
おもふ旨ありていへのはしらにかきつけ  
ける  
益荒雄のなすへきわさも知らてあれや  
たわやめもする歌よミはなそ 篤胤
- 15 平田篤胤短冊「言靈の」 短冊装 一点  
(36.2×6.0) 雄和町・齊藤壽胤氏蔵  
言靈のたすくるままに祝ひてよ  
ともに千世へて神ならましを 篤胤
- 16 平田篤胤短冊「玉禪」 短冊装 一点  
(36.4×5.8) 西仙北町・菅原康輝氏蔵  
玉たすきのふみの  
はしめによみて  
そへたる二首のうち  
玉たすきのふみのはしめによみてそへた  
る 篤胤
- 17 平田篤胤短冊「さかしらに」 短冊装 一点  
(36.0×5.9) 秋田市・大野整氏蔵  
常思ふ心を人のよめとこひけるに  
さかしらに言攀なせそいそのかみ  
古き神世の道はえしらで 篤胤
- 18 平田篤胤短冊「物識と」 短冊装 一点  
(34.4×5.8) 大阪府・古神道仙法教蔵
- 19 平田篤胤短冊「人はよし」 短冊装 一点  
(36.3×6.0) 大阪府・古神道仙法教蔵  
おもふむねありてよめる七首のうち  
物識といふハ誰か言靈幸はふ  
かみ代の道の本ハたとらで 篤胤
- 20 平田篤胤筆篤胤和歌「春といえば」 短冊装  
(36.3×6.0) 秋田市・彌高神社蔵  
皇國度制考のはしめによみてそへたる  
人はよしからにつくとも我か杖は  
やまと鳴根に立むとそ思ふ 篤胤
- 21 平田篤胤筆篤胤和歌「玉鏝の」 短冊装  
一点 (36.0×6.0) 秋田市・平野政高氏蔵  
玉鏝の道の長手をくるかつら  
くる日のしけき人やこの人 篤胤
- 22 平田篤胤短冊「さかしらに」 短冊装 一点  
(36.2×5.8) 東京都・平田神社蔵
- 23 平田篤胤短冊「花鳥を」 短冊装 一点  
(36.0×6.0) 秋田市・平野政高氏蔵
- 24 平田篤胤短冊「玉禪」 短冊装 一点  
(36.0×5.9) 秋田市・小谷部繁氏蔵  
玉たすきのふみのはしめによみてそへた  
る 篤胤
- 25 平田篤胤短冊「人はよし」 短冊装 一点  
(36.0×6.0) 秋田市・佐々木チエ氏蔵  
玉禪かけて祈らな世々の祖  
おやの御祖の神の幸はひを 篤胤
- 26 平田篤胤短冊「大そらに」 紙本軸装 一点  
(94.5×28.0) 昭和町・石川尚三氏蔵  
いややかいきとほり思ふよしありて



大そらに豊栄のほる朝彦も

しまし林のかけ隠すめり

27 平田篤胤短冊「玉鉾の」紙本短冊軸装 一点 篤胤

(98.5×23.2) 秋田市・彌高神社蔵

28 平田織瀬筆篤胤和歌「六十とせの」短冊

装額入 秋田市・平野政高氏蔵

本けかへりのいはひの日に

六十とせの一世をすきてまた更に

うふ声あくるけふにもあるかな 篤胤

篤胤の和歌

篤胤は作歌にあたり、真の感情を吐露した

ものを「正歌」といい、それに対して人に招か

れて歌会の席などで詠んだ当世風の歌を「作

り歌」といった。作り歌は後世に遺すことを

遺憾に思い、削っている。「思う旨ありて」

と詞書をしているものも多いのは、歌の真髓

は真情の吐露、真の抒情にあるべきだとい

う強い信念がうかがえる。そこに古道をひろめ

ようとする気魄と情熱をもった、国学者篤胤

の姿勢が強く表現されている。反面、人間性

の溢れた歌や温情に充ちた歌の側面もみられ

る。

篤胤の和歌論は『歌道大意』などに述べら

れているが、国学の本質は歌の道にはないと

主張している。歌の道からの国学より離れ、

古学の道を自覚的にとらえようとした態度が

そこにある。

29 本居宣長「ひも鏡」紙本墨書軸装 一点

(130.8×21.8) 協和町・物部長仁氏蔵

30 本居春庭短冊 紙本墨書軸装 短冊三枚貼

本居美濃解説付 一点 (89.7×31.5)

大森町・大友ヒサエ氏蔵

31 吉川忠行歌書 紙本軸装 一点

(130.5×38.5) 五城目町・渡辺彦兵衛氏蔵

32 落合東提書簡 紙本墨書軸装 一点

(37.2×49.0) 五城目町・渡辺彦兵衛氏蔵

33 篤胤肖像 絹本彩色軸装 大山順画吉川忠

安書 一点 秋田市・彌高神社蔵

34 「古道大元顕幽分属図説」写本 和紙墨書仮

綴本 筆者不明 一点 (23.0×16.5) 三丁

秋田市・平野政高氏蔵

35 「粟田宮考」写本 墨書和綴本 筆者不明

一点 (22.0×14.4) 一七丁 秋田市・平野政高氏蔵

36 篤胤和歌書 紙本墨書軸装 左註 一

点 (14.2×22.2) 秋田市・平野政高氏蔵

あし原のひとりをのこの／ひとりこと／曾

富騰よりほか／知る人もなし／よしかあしか／

こは此ほと四十とせはかりうれなく交りし／

学びのともにとせこな（た）のあらはせるふみと

も／見せけるにいたく嫌ひいとけしき学ひふ

／りをとてこの人にさへすてられたることの

／かねてかくあらむとハ思ひつつも且ハかな

／しくかつは憤ろしくもおぼいて自らかく／

なけき出たるなり／篤胤

37 平田篤胤筆「和魂漢才」絹本墨書軸装 秋田

県指定有形文化財 一点 (87.2×29.5)

秋田市・佐々木チエ氏蔵

菅家遺誠云凡国学所要自非／和魂漢才不能

闕其間奥矣／からにさえ和にたまと教へてし／神

の御言のかしこきろかも／平篤胤謹書詠／花押

38 平田篤胤書簡 紙本書簡紙卷子装 六人部

是香宛他 秋田県指定有形文化財 一点

(18.5×79.5) 秋田市・佐々木チエ氏蔵

39 平田篤胤六十年祭関係資料 紙本卷子装

篤胤書鐵胤書断簡他全九本 一点

(34.0×440.0) 秋田市・佐々木チエ氏蔵

40 神靈真柱大人神号 絹本墨書軸装 神祇

伯王書 一点 (113.0×34.6)

秋田市・彌高神社蔵

41 気吹乃屋大人像 絹本彩色軸装 鐵胤讚書

男鐵胤讚書／青海原潮の八百重の八十國につ

きて弘めよこの正道を／平篤胤

一点 (95.5×35.4) 秋田市・彌高神社蔵

42 平田篤胤和歌書 絹本墨書軸装 一点

(89.8×31.7) 秋田市・彌高神社蔵

鉄企都鄧利軻茂豆句志磨爾／和我謂祢志伊茂

播和素邏珥／響能據馭鄧母 篤胤

43 平田篤胤和歌書 絹本墨書軸装 一点

(41.6×26.7) 秋田市・彌高神社蔵

花鳥を吾も哀と／見てハあれと／あはれと歌

ふい／と無りけり／篤胤

44 平田篤胤「五徳説」 紙本板木刷軸装

一点 (124.0×38.2) 秋田市・彌高神社蔵

45 医薬二神神号書 紙本墨書軸装 一点

(124.0×33.4) 秋田市・彌高神社蔵

大貫穴大神／少彦名大神／こと國のくすしの

／わさも二柱神／のミたまや幸／はなるらむ

／篤胤書

46 迦牟那賀良之五大神字 絹本墨書軸装 一

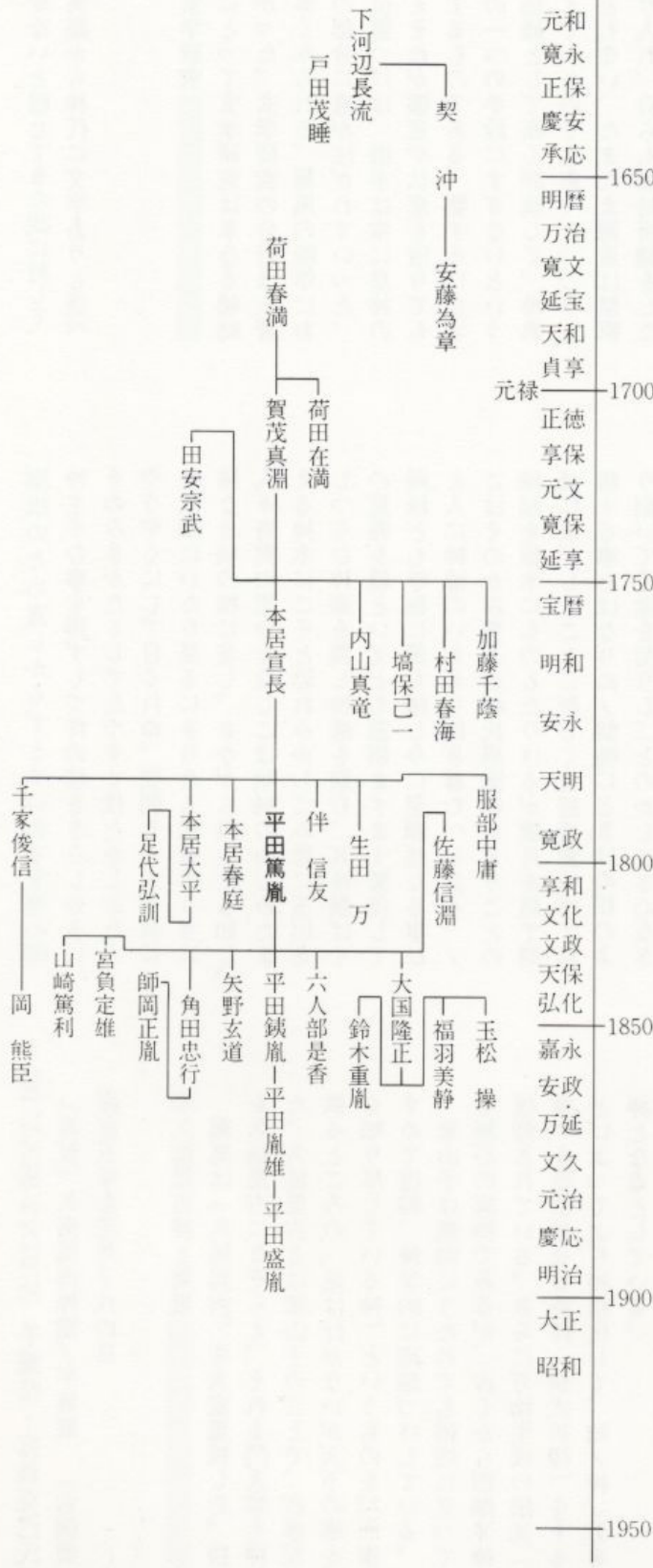
点 (33.1×100.3) 大阪府・古神道仙法教蔵

47 「カムナカラ」神字添書 紙本墨書 一点

(15.5×91.5) 大阪府・古神道仙法教蔵



国学者門流



一筆啓上仕候甚暑之節 / 御座候得共先以貴家被為揃 / 倍々御清栄可被成御座奉恭賀候隨而  
 当方親父初 / 家族無別義罷在候間乍憚 / 御休意可被下候  
 一親父書キ物之儀兼而被仰下 / 承引罷在候得共大方所勞ニ而 / 延引いたし候内改而筆取候事ハ / 例之六ヶ敷乍存延々に相成申候 / 然ル所昨日ハ気分も宜候ニ付一二 / 巾執筆いたし短冊等も少し / 相認候得共心ニ叶不申様子其内 / 客来ニ而休筆仕候扱此御額字ハ / 兼而御望之神代文字に而カム / ナカラとハ認候得共自分心ニは不叶 / 様ニ而進上可致哉否と案事 / 煩ふ事ニ御座候得共小子強而差上 / 候様相勸候事ニ御座候仍而先 / 差上申候心ニ叶不申

候ハ、無御遠慮 / 可被仰下認替差上可申其段私より申上と呉々申付候扱又  
 久延彦神画賛事も兼而認メ / 差上候心組ニ御座候得共前文之通ニ而延引いたし候何レ不遠内必相認 / 可申且外にも短冊ニ而も差上可申と / 申居候得共此度相認候は心に不叶 / とて差上兼候それこれ相揃ひ候 / 上ニ而と存候得共弥以延引ニ相成可 / 申候得は先此度御額字斗り差上 / 申候実ニハ延引之御断迄ニ御座候へバ / 御心ニ叶不申候ハ、必可被仰下候扱又 / 鹿趣御氏へも一巾差上申候是ハ / ヒフミの御歌ニ而御座候則此志封 / 乍御面到御届被下候様奉希候  
 一先日ハ長沢候御帰国ニ付玉襪 / 二部書状相

添差上申候此節ハ御帰 / 着ニ而右品も御落手被下候事と / 奉存候  
 扱色々申上度事御座候得共今日も / 無扱用向有之大略致候得共先ハ前書之儀 / 早々ニ申上度如此御座候何レ余情ハ / 后音ニ万々可申存候頓首  
 六月十九日鉄胤 / 羽田野君 / 玉案下  
 尚々松平君御兄弟之内御面 / 被成候ハハ乍憚宜御傳声奉希候  
**48 神字日文傳 平田篤胤自筆本** 和綴装本  
 二点 (28.0×19.0) 上下共二十五丁  
 秋田市・秋田県立秋田図書館蔵  
 □神字日文伝 二卷 文化八年  
 従来の学者は『古語拾遺』の説により我国



の上古に文字がないと信じてきた説に対して、篤胤は種々の実証から神代に文字ありと述べたもの。

### 篤胤の玄学研究

平田古道学にとって玄学研究は単なる補助的分野ではなかった。玄学研究の分野は全著作中で可成り多くみられる。篤胤の晩年において、特にこの部分に意が注がれていた。

この玄学の位置づけは、根本は常に皇神の道であり、例えそれが儒意や仏意を借りても解釈できるとするものである。要するに玄学も古神道解明の一つの手段にすぎないというのであるが、仙経として高く評価して、神典の次に位を与えていたのもあった。こうした玄学研究にもない、たまたま篤胤は禁厭も積極的に取り入れ、自らも加持祈祷をしたことが『平田日記』にみえている。

この研究に関わる著作では『密法修事部類』もあり、その他門人や極く特定の人々に所謂秘伝として具体的に伝授している呪禁法などもみられる。こうした真言密教研究が我国古伝、古意からの技術を伝えるものとし、実践的な神学面を形成する一助として考えられるものである。

### 49 御神木夫婦木之図

紙本板木刷軸装 一点  
(32.2×43.8) 千葉県・玉崎神社蔵

御神木夫婦木のこと

下総国海上郡飯岡浦に鎮座まします玉崎大明神は神武天皇の御母君海重命の弟姫にて玉依姫命と申し奉る。然るに御本社の後に一株の松の木ありて枝葉しげり覆ひ日影を満は御

屋根のため宜しからずとていぬる宝曆の御神主やむ事を得ずして件の松をきらしむるにそのみきかたくしてたやすく伐たをしかたなくやうやくにして日くれぬ。翌朝もろ人と共に社も頭にいたり見るにきりたる松夜のうちに傍なる楠の根に着し。さながら出生たる如し。人々奇異の思ひをなしこは明神のおしみたまえる神木にこそと恐れみかしこみ急に玉垣をしつらひ神楽を奏し神慮を慰む。其後幾ばくの星霜を経といえども靈樹ますます繁茂して両株とも年毎に葉を増し今に至顕然たる事ひと人に神徳のいさおし仰ぎ尊むべし云々。こはそのかみ里人岩崎氏感激のあまりことの縁起を版木にもおしたりけるが歳月を経て磨滅に及びしをことし新しく宮居造営の序て再板する事とはなりぬ。磐楠にときはの松のより副いて千世を契りしことのかしこさ心なき物とないひそ松の木いもせの道のあはれ知れるを／平篤胤

### 50 『磐笛能記』写本 半紙綴本

一点 『石笛の記』より  
(27.8×20.0) 千葉県・玉崎神社蔵

### 51 篤胤墨書断簡 書簡紙墨書 「磐笛之考」

一点 (14.0×38.5) 静岡県・三浦寛氏蔵

### 52 岩笛 石製 一点

(33.0×17.0) 千葉県・熊野神社蔵

### 53 平田篤胤久延彦画讃

絹本墨書軸装 一点  
(95.5×32.4) 千葉県・宮負克己氏蔵

古語云此神者足雖不行／盡知天下之事神也／平篤胤／満さし加流事能志留しは／天の下能／物識人や登比亭／知羅まし／男鐵胤謹畫印  
54 久夷毘古神靈 木製箱型内御幣安置 一点

(31.5×16.5×10.5) 千葉県・宮負克己氏蔵  
(表蓋) 久夷毘古神靈／平篤胤 (右側面)  
嘉永五年志毛月／八の日

### 久延毘古神と篤胤

篤胤は「久延毘古」を大変重視した。自身を久延毘古になぞらえ、それを門人等も拝した。久延毘古とは案山子のこと、古事記に依るところの「足は行かないが天下の事を悉く知り尽している神」というものを、一歩ずつめて信仰、神学的に理論づけしている。

案山子は風雨にうたれても田畑に立っている無心の寓物であるが、古くから田畑ノ神と信仰されている。さらに万物生成の根元(産霊)を憑依させる祈禱(祭式祈祷)をすることによってより人格化して、知ノ神、万有ノ神となるとしている。

### 55 平田篤胤日文字書

紙本墨書軸装 一点  
(102.5×35.5) 秋田市・平野政高氏蔵

天宇受賣命天石戸開廻時爾神懸乃御歌／ひとふたみよ。いつむゆな。／やこ、のたり。も、ちよろづ。／文政八乙卯年五月七日為弓削春彦老翁 平篤胤謹書花押

### 56 平田鐵胤書織瀬画「久延彦図」

絹本墨書軸装 一点 (88.0×30.0)

### 57 「大扶桑國考」版木

秋田市・平野政高氏蔵  
下巻 二点 (23.0×49.0×4.0) 桜木 上巻 二点

秋田市・秋田県立博物館蔵  
「大扶桑國考」二巻 天保七年刊  
「山海經」などの書をひいて、東方荒天に



は扶桑国という神真の靈域君師の本国があり、三皇五帝はこより出たとあることにより、天皇帝がそこを治めるものでという、さらに三皇五帝は皇神のことであるともいつている。本書はのちに幕府より絶版を命じられた。

「皇国異称考」と題した書の増訂版で、我を扶桑国という意味と、宇内万国の本国であると論じたもの。

58 平田篤胤和歌書

紙本墨書軸装

一点

(36.0×38.8)

協和町・物部長仁氏藏

大扶桑國考の首に／平篤胤／日むかしの／大樹の本の／神かたり／よもの本草の／言やめて／聞け

59 鈴木重胤和歌書

紙本墨書軸装

一点

(36.4×50.6)

協和町・物部長仁氏藏

60 平田篤胤書「言靈の」

紙本墨書軸装 一点

(29.9×10.5) 秋田市・秋田市立千秋美術館藏

61 大友直枝宛平田篤胤書簡

書簡紙本墨書巻

子装 一点 (16.5×19.5.0)

大森町・大友ヒサエ氏藏

如命未得貴意候得共被投／芳墨忝仕合拜見仕候／追日春暖相増候所彌々／御平安被成御勤學珍重／御事奉存候誠ニ貴君御事ハ／佐竹右京大夫様御領内之御方之／由は兼而承知仕里、小生義も／元來佐竹公御藩より出候／ものニて則親事ハ彼御國許ニ／罷在大和田清兵衛與申者ニ／御座候夫故別ニ、御なつかしく／阿まつさへ故翁御物故之／少シ前御病床にて御師弟之／約をも被成候様ニ承り傳へ／但シ是ハ／御狀ニよりて／思ふニ／尊叔か／同國之人にもさる仕合よき／人も阿りけるよと日比御浦山敷／且右之御厚志之御様子にては／御

學文もさこそくと御したはし九／松坂名古屋へ數へん御上候事／問ひ遣し候事ニ御座候如命以來ハ／無御隔意御懇意仕度日比／希候所ニ御座候

一 愚著鬼神論御覽被下候由／過當之預御賞譽汗顔之／至ニ奉存候御聞及被下候哉らん／小生事ハ故翁御没故ハ一昨／年與申年ニ始而御名を／さへニ承り且古典をも讀始候／事ニ御座候へば淺學之所御察／可被下候實ニ、道の赤子ニて只々／信實ニ學び候と申迄ニ御座候

一 眞國春海贈答書御覽之由／委曲御評之如くニ御座候但しこの／贈答の起ハいさ、か謂御座候事ニて／眞國は強て争ひを求め／春海ハ夫をなぶり心ニ彼の／狂言を放ち候ニ御座候小生常ニ／申候ハ彼等が故翁をそしめるは／廣むる道理ニて随分よろしきこと／(中略)

理なれども此方より求め争ふ／などハ入らざること同志之者と／申合候事ニ御座候扱は過去り候事御同様ニ斯天の下ニ敵なき／學文を致し候事ハ愉快く／御事ニ奉存候

一 貴君御事御叔父様／故翁／門人帳ニ大友永太とい／ふ人あり尊叔の事か／承度候／御本意を御續き／被成其許ニ御勤學之由／目出度奉存候小生弟甥など／秋田ニ居り候故御在所近くニ候ハバ／御取立をも御頼申候半与／樂しミ居り候所御書を拜見／扱々力を落し候事ニ御座候／但シ八澤木ハ秋田より道／何程候べしか小生不案内ニ御座候／方角路程承度候また／いつ比御歸國にか其砌ハ御立／寄奉待入候

一 小生秋田を出候て最早／十三年ニ相成候其上

以前ハ／不心懸候事故打忘候事／がちニ相成候乍去彼國ニも／古風古言之残り候事折々／存出候事ニ御座候其一ニを／申候ハバ譬へばゆふべ何某をタシダシと夢見しなどいふ是古事記に打や阿られの／タシダシにと阿るタシダシなり／また云々ハホトホトいやだ／などいふこれ殆の古言也又蝶の少きをペラコといふ是字鏡ニ阿る／川ヒラコとある古言の残れる也／君ハ元來御志阿りて近比／より其地へ御勤學なれば是／等の御考もさこそくと奉存候也扱々様ニ書つゞけ餘りはてしなく候間／先是にて投筆仕候猶後便／可申上此御狀先月中旬ニ相達／候へ共彼是繁多ニ取粉れ御答／延引ニ相成候眞平御仁恕可／被下候 以上／三月十六日／篤胤／大友直枝 様

62 大友教藏宛小野崎通亮書簡

紙本墨書 一点

(19.5×33.0)

大森町・大友ヒサエ氏藏

63 平田篤胤書「惟神」

紙本板木刷軸装 一点

(39.7×55.3)

大森町・大友ヒサエ氏藏

惟神／謂髓神道亦／自有神道也／右日本書紀本文本註／天保十二年辛丑三月於下野國／仁良川旅宿為門人等平篤胤謹書／印

64 平田篤胤稿本断簡

紙本墨書 一点

(24.5×34.5)

大森町・大友ヒサエ氏藏

65 岡見知平書簡

紙本墨書 二点

(21.3×53.3)

大森町・大友ヒサエ氏藏

66 平田篤胤自聞受書

和綴本墨書 一点

(24.9×17.2)

秋田市・西宮春夫氏藏

67 平田大覚自蹟写本

和紙墨書假綴本 一点

(25.5×17.8) 二十一丁

昭和町・石川尚三氏藏



68 小谷部吉訓他宛平田鐵胤書簡 紙本墨書軸装

一点 (17.3×49.8) 秋田市・小谷部繁氏藏

一筆致啓上候秋冷之節御座／候得共愈御安全被成御揃珍重／奉存候然者今般從／神祇伯王様亡父在世中勤學／之功勞被為思召靈神号賜之／神靈能真柱大人と可相唱称辞／をも被為加殊二右靈号／伯王様御染筆被成下候條於／私重疊難有仕合奉存候此段／御吹聴申進候御同慶可被下候右／為可得御意如斯御座候恐惶謹言／九月十四日 平田内藏介／菅井正八様／東海林万蔵様／小谷部甚左衛門様

尚々右靈号者先月廿一日京都／御差立二而当月十日拝受仕候已上

又申候桜田石古川両子ヲ始メ／其外御懇志之衆中ハ御序之砌／宜御通声被下度奉希候以上

69 四大人畫像 紙本彩色軸装 一点

(96.3×53.9) 京都府・伏見稲荷大社藏

荷田宿彌羽倉大人／ふみ分よ倭にはあらぬ漢鳥の跡を／見るのみ人の道かは

賀茂縣主岡部大人／飛驒たくみほめて造れる真木柱／たてし心は動かさらまし

秋津彦瑞櫻根大人／師木嶋の山跡こころを人とは、／朝日にほふ山桜花

神靈能真柱大人／雲となりあるハ雨ともふりしきて／神代の道に身をやつくさむ

平鐵胤謹書

70 四大人肖像 紙本彩色軸装 鳳齋写 一点

(130.0×32.5) 京都府・伏見稻荷大社藏

71 平田篤胤大人肖像 紙本彩色軸装 板木刷 一点

(39.5×25.0)

大阪府・古神道仙法教藏

此贈正四位平田大人の御像／ハしも去にし天

■ 気吹舎門人全国分布

■ 平田篤胤祭祀神社分布



門人総数 4,419人

「門人姓名録」無窮会図書館神習文庫蔵写本による

○印数字は入門者数



保の頃大人の／世にいまそかりしほと秋田人／河原田兎毛氏の親しく図／写し奉れるにて其本姓大／和田氏に持伝へありしを再写／したるものなりげにも雲と／なりあるハ雨とも降り志き／て神代の道に身をや尽さむ／とよみ出て給ひしみこ、ろ／おきての雄々しさもおのづから／御かほばせにあらはれ朝夕／に見上げ奉りし當時を志ぬ／ばる、はかり筆の色とりいと／たくみにもうつしなせるもの／かなおのれ幼時大人のをしへ／うけつる因もあれハ後のあか／しにそのゆゑよし書きしる／してよとこはる、ま、につ、りい／てつる

一いつとこれ／明治二十とせあまり一とせと／いふとしの四月／ 従七位 小野崎通亮

**72 菅原豊秋宛平田鐵胤書簡** 紙本墨書 一点  
(36.0×47.4) 一折函面

西仙北町・菅原康輝氏蔵  
新春之御慶不可有尽期／目出度申納候先以其御許／御家内御揃弥御安康被成／御越年珍重之御事ニ御座候／髓而当方無異致加年候間乍／慮外御安意可被下候先者／右年始之御祝詞為可得／御意如斯御座候猶期永日之／時候恐々謹言／平田内蔵介／鉄胤花押／正月十一日／菅原善兵衛様／人々御中

尚々御老人方御始御家内御一統へ／御祝詞申述度宜敷御伝声可被下候／当方母初家族共一同宜申上与申／出候以上

又申候以来御互ニ用事御文通之節ハ／吉川か大山の内へ差出候様可致候乍去／身勝手次第限り之事ニハ無御座候

二白田臘御差出之御状去ル八日相／届致拝見候其節弥御安主奉賀候／扱昨年来御遠々敷御座

候所全御病氣／ニ而御疎遠ニ御座候段委曲御挨拶被／仰越被入念候義致承知候其後／弥御全快之御様子目出度致安心候

一兼而御約束之彫刻料一円御越被下／髓ニ落手いたし辱奉存候追々出来／候様可致候

一庄治方へ向ヶ筆紙料ニ朱御越之由／被仰越候得共右ハ未相届不申候同人方／御せんさく可被下候 御用事之節ハ直々此方へ／可被仰下候無御遠慮候事

一昨年差置候農業ニ部葛仙翁文粹／等之料御尋被下右ハ三部ニ而金貳百疋程／ニ而宜しかるへく候中ニも余話ハ当地書肆ニ／無之困り申候

一清郷□当春ハ上京之由折角待居可申候／其外同門の衆中安全之由致大慶候／ 御序ニ宜し九御致声希申候

一坂口氏跡角館へ被引取候由斬愧察入候／御序も候ハ、宜し九

一真菅の屋と申屋号御称被成度との事／被仰下何レとも御勝手次第第二而宜しき事と／被存候篤の字之事ハ亡父存生ニ無之候事故／いかにも小子より御返事申上兼候御勘考／可被下候

一去秋より御肝煎役被蒙仰候よし／目出度御苦勞之御事ニ奉存候折角御精勤／可被成候道の為致大慶候

一母持病も御尋被下御深切辱惣躰／快方ニ御座候間御安意可申候／猶色々得御意度義多々御座候得共年頭多／忙ニ付期後音右略いたし候猶今春余寒／可有之御病後御自愛專要之事と奉存候／以上

**73 笏靈代** 杉木笏状

一点

(34.5×5.0×0.7) 西仙北町・菅原康輝氏蔵  
(表) 靈真柱命 (裏) 安永五年八月廿四日  
生／天保十四年癸卯閏九月十一日没

**74 『和歌属辞』** 紙本墨書和綴本 菅原善兵衛豊秋著 一点 (21.2×15.6) 一〇〇丁  
西仙北町・菅原康輝氏蔵

**75 寿詞** 紙本墨書 一点  
(48.9×34.4・15.9×119.4)

**76 『篤胤和歌』** 菅原豊秋習作 書簡紙墨書 一点 (25.2×33.1)  
西仙北町・菅原康輝氏蔵

**77 『痲瘡除電草考全』** 半紙墨書仮綴本挿図彩色 宮負定雄著 一点 (24.0×17.0) 三十丁  
千葉県・宮負克己氏蔵

**78 『あつた草』** 木版刷本紙 一点  
(17.5×25.6) 千葉県・宮負克己氏蔵

**79 辞世** 紙本墨書軸装 一点 (15.5×34.4)  
東京都・平田神社蔵

なかつき十まり／九日の日(こ)ち／ことによからず／今やしぬべく／おぼえしかば／篤胤／おもふことの／一つも／神につとめ／をへす／けふやまかるか／あたら此世を

**80 『伊布伎於呂志』** 版本 板木刷本 二点  
(23.7×16.0) 上五十丁 下三十一丁付一

**81 平田篤胤大人肖像** 絹本彩色軸装 高橋万年筆 一点 (166.0×98.5)  
秋田市・彌高神社蔵

**82 四大神号** 紙本墨書軸装 平田鐵胤書 一点 (114.8×23.6)  
秋田市・彌高神社蔵



荷田大人／縣居大人／秋津彦美豆櫻根大人／  
神靈能真柱大人

秋田市・彌高神社藏

83 篤胤稿本断片 紙本墨書軸装 一点

(114.8×23.6) 秋田市・彌高神社藏

84 神靈真柱之大人神号 紙本墨書軸装 平田  
延胤書 一点 (66.0×29.0)

秋田市・彌高神社藏

85 神拝詞 紙本墨書卷子装 平田延胤書 一点  
(16.7×359.5) 秋田市・彌高神社藏

86 篤胤稿本断簡 紙本墨書卷子装 旧題「平  
田贈正四位墨宝」 一点 (23.3×31.7)

秋田市・彌高神社藏

87 篤胤大人遺品装束類 烏帽子  
(28.8×12.8×15.7) 直衣 (69.5×163.8)  
袴 (55.5×87.6) 麻衣製

秋田市・彌高神社藏

88 平田篤胤大人塑像 石膏彩色 一点  
(23.0×16.0) 秋田市・彌高神社藏

89 平田篤胤大人塑像 石膏黒単色 一点  
(11.3×16.5×21.8) 秋田市・彌高神社藏

90 久延昆虫画像 紙本板木刷軸装 一点  
(103.0×27.8) 秋田市・笹村良成氏藏

91 『氣吹舎歌集』 和綴複製印刷本 一点  
(23.3×16) 四十五丁

雄和町・齊藤壽胤氏藏

92 口傳禁厭法板木 (桜木) 同刷本紙 一点  
(20.5×21.5×2.5) 秋田市・総社神社藏

93 篤胤大人胸像 墨単色 一点  
(85.0×66.0×40.0)

秋田市・秋田市立明德小学校藏

94 門人姓名録 井上頼岡校本無窮会文庫蔵版  
複製本 四点 (20.5×14.5×1.5)

### 秋田の平田門人

氣吹舎門人帳によれば、篤胤の生前(天保十四年)の門人は五十二人を数える。文化九年に大友直枝が入門しているのを始めとして、天保十二年国許退却となる篤胤は、四月二十二日秋田の地を再び踏むが、その間までの同国人の入門者は十七人である。この中には小野岡市太夫、梅津主馬など藩家老や武士など生家の大和田盛胤のほか、佐藤信淵や神官の名がみえる。帰郷後、藩の処遇はけつしてよいものとはいえなかったが、門人はやはり他国に比して断然多く、支持者もいた。

弘化元年以降の入門者、いわゆる没後の門人は二百六十三人をみるにいたる。文久三年の没後二十一年目には国学塾ともいえる雷風義塾の設立により、本格的な平田古道学が小野崎・吉川らが講師となり、明治五年まで開設されてきた。時代の波が大きく変革しようとしていた幕末期から明治維新にかけての入門者はすこぶる多くなる。この時期に秋田の入門者も最高となり、維新の根本思想として中心的役割を担う平田派門人も多く輩出した。

りもはるかに古史に近いと考えて著したもの。

古代からの経験的事実にもとづく解釈により、規範的性格を介在しうるこの研究方法に、古道学的性格がみられるものとして注目されている。

96 『玉禪』 平田篤胤自筆本 和綴装 一  
〇点 (25.0×16.6) 一巻五十丁、二巻四  
十三丁、三巻五十八丁、四巻五十三丁、五  
巻、六十六丁、六巻五十六丁、七巻五十丁、  
八巻四十五丁、九巻五十四丁、十巻廿七丁

秋田県立秋田図書館藏

□玉禪 十巻 文化八年

篤胤の学問の基礎があらわれている著書で「毎朝神拝詞記」を解釈し、その上に古道学に神道を構築して展開させた著作。神々の御伝・神拝の心得。祖先祭祀・神徳・神道の本義などを解いたもの。

国学が春満以来種々の努力と事情によって発達してきた歴史神道要論ともいえる書である。

97 『皇國度制考』 平田篤胤自筆本 和綴装  
一点 (25.0×16.7) 三十四丁

秋田県立秋田図書館藏

□皇國度制考 二巻 天保五年成立

屋代弘賢の求めに応じて著したものの。大倭心を固め、それを天御柱としてたて、さらにそれを御量柱にすえる。

日本の度量制度史に関する考察の著書で、アタ、ヒロ、ツカなどの皇朝古尺の一証まで考証している。度制の科学的考察にかなりゆきとどいた見識を見ることができるといえる。

98 『醫道大意』 平田篤胤自筆本 和綴装 二  
点 (25.0×16.7) 上五十三丁 下四十三丁

95 『古史成文』 平田篤胤板本自筆書入 和綴装  
一点 (27.0×19.2) 一一九丁

秋田市・秋田県立秋田図書館藏

□古史成文 三巻成文 文化八年  
文政元年成刻

諸古典にみえる古伝から事実の伝えを選び出し、集めて編集したもので、これが古典よ



丁 秋田県立秋田図書館蔵  
□「医道大意」(別名 志都乃石屋) 二卷

文化七年

医道全般にわたって総編したものの。特に方術により未病を治し、医薬をもって己病を治するのが古代の真の医道であることを説き、医者ばかりではなくて人々も医薬方術の道を学ぶべきであるといっている。医師は知っていてもこの古来からの医道を知らない者が多いことや、人体の官能や養生のことも説く。神医道の淵源を論じた書。

99 『印度蔵志』 平田篤胤自筆本 和綴装 十

一点 (26.6×18.4) 一卷四十七丁 二卷四十九丁 三卷五十一丁 四卷五十丁 五卷五十一丁 六卷七十八丁 七卷五十八丁 八卷四十三丁 廿一卷六十四丁 廿二卷五十九丁 廿三丁五十四丁

秋田県立秋田図書館蔵

□「印度蔵志」

文政三年に稿を起し、文政九年に十巻が完成。二十三巻のうち(九〜二十一巻欠)が現存している。

巻一〜三は「印度国俗品」で、地理、種族、風俗、習慣などを考察したもの。巻四〜八は「大千世界品」で万物の生育するこの世界の成立に関する諸伝説について記したものである。巻二十一〜二十三は仏教の成立過程を含めて、大乘仏教経典、法宗について批判的に検討したものである。

インドに多大な関心を寄せていることや、

西欧に対するインドの文化的優位性を確認しているものである。当時、インド学の基礎的な部分に着目し論述している者は少なく、篤胤の洞察には優れたものがあつたといえる。

100 『夏殷周年表』 写本 和綴装 一点

(26.6×18.4) 三十丁

□「夏殷周年表」

この年表は二段対照式にして、上段は「史記」の本紀、魯の世家十二諸公の表・六国表

「竹書紀年」等によって篤胤が自らつくった真年曆譜をかけた、下段は三統譜の年表をつらねることにより、一見して真偽が明らかになるように工夫したもの。曆年などの学にかに通じていたか、またそれに強い関心を示したかが知られる。

101 『赤縣太古傳』 写本 和綴装 三点

(26.0×18.2) 一卷七十二丁 二卷六十一

丁 三卷七十一丁 秋田県立秋田図書館蔵

□「赤縣太古傳」 三卷 文政三年〜十年

唐土の去籍を普く探り、そこに伝わる古伝を正しく考え見直したものである。比較実証の書で、道教学研究へ傾倒していった実態がよく解る書である。

平田塾の教科書として、読本の中に入れられている。

102 『仙童寅吉物語』 写本 和綴装 二点

(27.0×18.9) 上五十丁 下五十三丁

秋田県立秋田図書館蔵

□「仙境異聞」(別名 仙童寅吉物語) 五卷

文政五年

七歳から十四歳までの七年間、信濃国(長野県)にある浅間山にいる神仙に仕われた小年寅吉が、その間に自ら見聞した事を篤胤が詳細に聞き書きしたものである。この書は古道の学問に考徴すべき事が少なくないものであるが、容易に理解できないものとして、「神の道を知らざる凡学の徒に示すべき物には非らずとぞ」と述べている。幽界神仙の実証例として強い関心と、幽冥観を論証するよすがとした。

103 『俗神道大意』 版本 和綴装 三点

(23.2×16.0) 一卷四十四丁 二卷四十九

九丁 三卷四十七丁

秋田県立秋田図書館蔵

□「俗神道大意」

四卷 文化八年

当時代、全国的勢力のあつた吉田家の唯一の神道、他諸家神道を批判し、古来からの真いたものである。

104 『古曆傳』 写本 和綴装 四点

(27.0×18.9) 一卷六十六丁 二卷六十八

丁 三卷七十一丁 四卷五十七丁

秋田県立秋田図書館蔵

□「太昊古曆伝」

四卷 天保七年

太昊古曆が中国のもつとも基本的な曆とし、秦漢以前の古書に古曆の法が散見するとのべ、それを集めて本文として古天文・古地理・古曆数の正旨・干支の起源やその用法までを明らかにし、これよつてのちの曆を正した上で俗説を排斥し、古来からの正しい曆数があることを述べている。

105 『靈能眞柱』 版本 和綴装 二点



(26.6×18.5) 上六十四丁 下七十八丁

秋田県立秋田図書館蔵

□霊能真柱

二巻 文化九年

古史成文にもとづいて解説を加えているもので、天地創造から顕事・幽事・天・地・泉・日・月・星などについて詳述している。

最愛の妻であった織瀬の死により、死後の魂の行方について強い刺激を受けて完成した。死後の魂の行方については黄泉に行くのではなく、幽冥に行くという説を展開している。篤胤の幽冥観をうかがうのに重要で、後々神道者にも強い影響を及ぼした。

106 『天朝無窮曆』 版本 和綴装 十九点

(26.6×18.5) 一卷九十七丁、二巻七十八丁、三～五巻各七十七丁、六巻八十九丁、七～十八巻各七十七丁、十九巻四十八丁

秋田県立秋田図書館蔵

□天朝無窮曆

前篇六巻 付録一巻

天保八年成立

後篇十二巻 天保九年成立

神武天皇元年より持統天皇十一年の間の干支を詳細にかかげたもので、『古史年曆編』とともに古暦研究の重要な書である。この中で、当時の暦研究に批判をしている。これらによって幕府から弾圧される一因となった書である。

107 『古今妖魅考』 写本 和綴装 七点

(26.2×18.0) 一～三巻各六十丁、四巻七十五丁、五巻八十一丁、六巻七十三丁、七巻七十一丁

□古今妖魅考

七巻 文政五年

秋田県立秋田図書館蔵

古今の記録物語書などを全て探って、その

中から天狗・妖魅や地獄・極楽などというもので人をまどわしたり、奇異な体験を見せたりして人を信じさせることなどを批判的に説いている。さらに、三熱ということがある因縁まで詳しく論じたもの。いわゆる、邪神の研究書といつてよい。

108 平田篤胤著述書版本

秋田市・彌高神社蔵

古史成文・三 古史傳・一六 俗神道大意・四 靈能真柱・二 玉樽・三 古今妖魅考・三 鬼神新論 三五本国考・二 神字日文傳・二 疑字篇 古易成文 悟道辯・二 西籙概論・二 皇典文彙・二 大道或問 入学問答 童蒙入学門 三神山餘考 牛頭天王曆神辯 春秋命歴序攷・二 赤縣太古傳成文 古史本辭経・四 醫宗仲景考 皇國度制考・二 弘仁歴運記考 三易由来記・二 古史微開題記・四 神代系図古史微 古史微・六

□古史伝

三十九巻 文化八年起稿

古史成文の神代の部百六十五段を一段毎に詳しく解釈したもので、それに古道の真意を示している。古史成文の本質に関わるものを明らかにしている。古史伝の名は宣長の『古事記伝』になつたもの。

古史伝を根本として、平田古道学の大系をたてたといつてよい著作で思想的にも重要なものである。

二十八巻までが篤胤の著述だが、未完成に終つたものを門人矢野玄道が編纂を続けたが、玄道もまた完成し得なかつた。

□鬼神新論

文化二年

儒者の無神論に対して有神論を主張したも

のである。儒者が上帝・天帝といったようなものは、皆天津神のことであり、我國の神代からあるとしている。

109 気吹舎門人関係著述書版本

秋田市・彌高神社蔵

玉鉾物語 神慮略述頌全 稽古要略 祭文例 比賣嶋考 古道訓蒙頌 古学二千字 玉鉾百首解・二 宮比神御傳記

110 平田篤胤翁画像 絹本彩色軸装 篤胤和歌短冊貼込 (33.5×17.3.0) 川原田兔毛筆

秋田市・高堂五郎氏蔵

大扶桑國考のはしめに「ひむかしの大樹のもの」との神語りよもの本草の言やめて聞け 篤胤

111 平田篤胤翁画像 紙本彩色軸装 頼三樹筆 一点 (70.0×22.9) 秋田市・彌高神社蔵

平田篤胤翁画像 / 先生平氏通称大角号伊吹乃舍出羽秋田之人也 / 出江戸而脩学慕鈴本翁欲入門翁既歿之後告志 / 于春庭大平之諸家称歿後之門人遂立一家大見誠至 / 説古今未発之確論其名震海内入門受業之 / 王頗衆哉 / 後年識益高学愈英逸既探漢土印度之古 / 籍明我皇朝之典教世称古今独歩千載之二人 / 鈴屋 / 翁之学至于爰全備焉著書頗多矣天保十四年 / 癸卯九月十日歿年六十八諡日靈迺御柱及靈神 / 嘉永己酉二年採筆於仙臺客館 / 頼鴨屋謹記

112 平田篤胤肖像 絹本彩色軸装 菊地容齋筆 鐵胤贊書 (97.3×35.4)

秋田市・川尻弥太郎氏蔵

平篤胤 / 物知りといふハ誰かこと靈幸ふ神世の道の本はたとらで / 男鐵胤書

113 平田篤胤父子像 紙本彩色軸装 高橋万年筆 一点 (27.0×23.9) 秋田市・彌高神社蔵

秋田市・彌高神社蔵



五尺の身はみな瞻の篤胤も子を思ふ道にまといぬるかも

114 平田篤胤和歌 複製 紙本墨書軸装 一点 (31.8×28.1) 秋田市・彌高神社蔵

日向の人大神貫道が瀟能基呂嶋日記なる圖をわがをしえ子なる百川篤胤に寫させてつらつら見つつ言擧しつる哥七種／百八十の嶋のはじめと御祖神のかきなし坐る嶋はこの嶋／國中のはしらと神の衝きたてし瓊矛のなれる山はこの山／この玉はその玉矛に天津神のつけて賜へる御しるしの玉／此のはしら衝きかためてゆ神ながら萬の業ははじめ給ひき／神業のあとにならひて人皆もまず固めてよ玉の柱を／わが御世の事は能しも神ならひ習ふぞ人の道にはありける／物知りといふハ誰が言たまちはふ神代の道の本はたとらで

115 平田篤胤和歌画像 紙本彩色軸装 板木刷 一点 (90.0×34.0) 若美町・某氏蔵

浅間山にます／神より爰に／うけ給はれる／御をしへのころを／なせハ成りなさねは成らすなる業を／成らずと捨てる人のはかなさ篤胤 皇國度制考の／はじめによみて／そへたる／人はよしからにつくとも我か杖は／やまと嶋根に立むとぞ思ふ 篤胤

此の贈正四位平田大人の御像／はしも去にし天保の頃大人の／世にいまそかりしほと秋田人／河原田兔毛氏の親しく図／写し奉れるにて基本姓大／和田氏に持伝へありしを再写／したるものなりげにも雲と／なりあるハ雨とも降り志き／て神代の道に身をや尽さむ／とよみ出で給ひしみころ／おきての雄々しさもおのつから／御かほばせにあらはれ朝夕／

に見上げ奉りし當時を志ぬ／ばるるはかり筆の色とりいと／たくみにもうつしなせるもの／かなおのれ幼時大人のをしへ／うけつる因もあれハ後のあか／しにそのゆえよし書きしる／してよとこはるるままにつつりい／てつる一ことそこれ／明治三十とせあまり一とせと／いふとしの四月／從七位小野崎通亮

116 雷風義塾の碑

現在、秋田市中通六丁目三番地に雷風義塾の碑がある。雷風義塾は門人小野崎通亮、井口糺らが、平田学を中心とした学塾を興したものである。

117 生誕の地碑

後桃園天皇安永五年（一七七六）丙申八月二四日申の下一刻、出羽国秋田藩佐竹氏の城下久保田中谷地で、大番組頭祿百石の大和田清兵衛の四男として誕生、正吉と命名された。この生誕の地には現在二基の碑が建立されている。一基は明治四一年九月二二日に建立された。

嗚呼勤王平田先生誕生之地  
一基は昭和三年陸軍記念日に建てられたもので  
平田篤胤先生誕生之碑

生家である大和田氏は桓武天皇の皇子葛原親王の裔と伝えられ、千葉氏の庶流で三六代にあたるのが父清兵衛祚胤である。大和田家の菩提寺は秋田市赤沼の本念寺である。生誕の碑は秋田市中通四丁目二番地に、大和田家の跡、歩兵第一七聯隊敷地の一部となり、現在児童小遊園地となつてるところにある。

118 終焉の地碑

天保一二年、大人の卓抜した、時流を超えた学問と道において、当時の幕府の根底をゆるがしめるに至つて、国許退却の命により帰秋し、しばらくの間大和田生家の一室に寓居していたが、次年の四月には藩より中亀ノ町に居宅を賜わり、ここでついには天保一四年閏九月一日に没した。

おもふことのつとも神につとめおへす  
けふやまかるかあたらし世を

この和歌が最後に詠じたものとなり、まさに辞世となつたもので、大人の深い思惟がこめられているといえよう。この碑は秋田市南通亀の町五番地の仁平氏宅内にあり、表には

平田篤胤大人終焉之地  
裏面には

曾孫平田盛胤謹書 昭和一二年九月一日  
仁平俊蔵建之 石工加藤幸助

と刻されている。  
大人は幽界にして、弘化二年（一八四五）

三月に神祇伯資敬王から  
神靈真柱大人

の諡号を贈られている。

119 奥津城（奥墓）

篤胤大人は生前に墓地として手形山広沢山と定めていた。それによつて大人の逝去にあつては、この地の小高い丘の上に安置されたのである。奥津城は安山岩の自然石に、表には

平田篤胤之奥墓

裏面には



天保一四年癸卯閏九月一日

と刻され、台には切石を一段積にし、それを方形に玉垣で囲んだものである。

なきがらはいづこの土になりぬとも

魂は翁のもとに往かなむ

と詠った御心を体し、皇太神宮の座します伊勢国、神とも師とも仰ぎ尊び親んだ本居宣長翁の奥津城のある伊勢国に向つて、正装正座にて葬むらわれていると伝えられる。

奥津城前方両側には百年祭記念碑一対が建立されている。生田萬をしていわしめた

古今五千載之一人

宇宙一万里之独歩

と記した石柱がある。

やや後方には、平田大人室織瀬、後室お里勢の両夫人の招魂碑がある。この、大人畢生苦学大成の内助者である両夫人の碑は、昭和七年の九十年祭の時に建立されたものである。両夫人は、大人が二五歳の時に織瀬を迎えたが、三九歳の時に病気で夫人を失い、四三歳に後室としてお里勢を迎えたのである。

没後の両室に対しては、安政二年に霊神号を賜い、二神合祭が認可されて

前神靈能真柱女霊神

後神靈能真柱女霊神

と称えられているものである。

さらに後方奥まった所には

小谷部甚左衛門吉訓之墓

があり、裏には墓誌銘を彫んでいる。小谷部甚左衛門吉訓は、八橋日吉八幡神社の祠官として、権中講義ともなった平田門の一人であった。甚左衛門は日吉八幡神社境内に、春秋

祭祠の祭に敬慎してきたところの平田大人を祀ろうとして積極的に働きかけ、ついには彼を中心とし明治一四年に平田神社を境内社として、正式に創建をみたのである。その平田神社が後の彌高神社となり、旧県社に列格されたものである。

両夫人、並びに甚左衛門は、大人の奥津城後方であたかも後進を敬慕するかの如く鎮まっている。

国指定 史跡

平田篤胤墓

昭和九年五月一日指定

## 刊行にあたって

本年は皇太子殿下の御結婚の儀が六月に行われ、また第六十一回神宮式年遷宮が十月に行われ、真に慶賀の極みでございます。この佳き年は奇しくも平田篤胤大人の没後百五十年に当たっており、当彌高神社に於きましても百五十年式年祭諸儀、記念事業、記念行事、記念出版などを計画いたし、この「平田篤胤大人図集」はその記念出版のひとつでございます。

平田篤胤大人の御遺品や関係資料の展示公開は、丁度、五十年前に「百年祭記念展覧会」が秋田県立図書館に於いて行われ、関係図書類も含めますと五百数十点もの陳列があったと記録されており、その後、当社社の研究所に於きまして、この陳列目録を参考にして昭和五十七年より調査を行い、その所在を確認しながら、時々資料展を開催してまいりました。大切に保管されているものもありましたが、戦後の混乱と価値観の逆転のなかで、代替りによりその継承がなされずに不用のものとして処分されたり、時の経過とともに所在が不明になったり、また業者の手になり店頭で商品となっていたり、いろいろでありました。

そのようにことを進めるなかで、何等かの形で記録として後世に伝える必要を痛感し、平成元年に秋田市立赤れんが郷土館と共催でおこなった「平田篤胤大人展」の際に、展示品の撮影をおこない、それに解説をつけた図録を発行いたしました。

この度はこの図録を基本資料とし、新たに収録した資料を加えて「平田篤胤大人図集」として発行することにいたしました。この発行にあたり、快くご協力いただきました秋田市立赤れんが郷土館に深く感謝申し上げますとともに、連日夜半まで編集にあたっていただきました佐々木榮孝、齊藤壽胤、中田好彦各氏に厚く御礼申し上げます。





## 彌高神社

祭神 神靈真柱大人命  
佐藤信淵大人命

明治14年秋田市八橋に平田神社を創建し、平田篤胤大人を祀ったのが始まりである。昭和42年秋田県教育会が崇敬母体となって旧八幡宮（文政2年九代藩主佐竹義和公が久保田城内に建立）を譲り受け、秋田市中通四丁目に奉遷、この時佐藤信胤大人命を合祀、社名を彌高神社と改称。大正5年現在地に再び遷座、同8年には県社に列格される。

秋田県指定有形文化財

昭和28年10月5日指定

本殿	正面三間	側面二間	入母屋造	
		向拝三間	銅板葺	一棟
拝殿	正面五間	側面四間	入母屋造	
		向拝一間	銅板葺	一棟



No88

## 平田篤胤大人図集

平成5年11月2日 初版発行

平成6年1月15日 改訂版発行

編集発行 彌高神社平田篤胤佐藤信淵研究所

秋田市千秋公園1番16号

〒010 TEL 0188-32-4496

印刷 (株)塚田美術印刷

秋田市大町一丁目6番6号

〒010 TEL 0188-23-5551